

はじめに

勉強方法

文章問題

① 読む

—— まず文章を読みましょう。

② 線を引く

—— 大切だと思うところにチェックをしま
しょう。

③ 問題を解く

—— 文章の後についてある問題を解きましょ
う。

④ 文章の解説動画を見る

—— わからないところがあれば、ノートを
とつておきましょう。

※ ③と④は入れかわってもかまいません。

⑤ 問題の解説動画を見る

—— 丸つけをしながら、まちがったところを
理解しましょう。

授業動画は《文章（本文）の解説 ↓ 問題の解説》の順で展開されているので、①②の段階で難しく思うのであれば、まず④の解説を見てから問題を解いてください。その後、問題を解いてみましょう。

⑥ 復習

—— 文章を音読し、意味のわからないところ
がないか確認。

—— また、まちがった問題、正解していくたけ
れどよくわかつていなかつた問題をも
どつて確認しましょう。

知識問題

① 知識の解説動画を見る

――問題を解く前に必ずチャプターの解説動画を見てください。

――まちがつた考え方で解いてしまうと、まちがつた考え方のクセがしてしまうので、その前に動画で正しい考え方を理解してから解きましょう。

② 問題を解く

――考え方を身につけた後に、問題を解いてみましょう。



③ 問題の解説動画を見る

――丸つけをしながら、まちがつた問題の考え方を理解していきましょう。



④ 復習

――まちがつた問題をしつかり見直し、やり直しましょう。自分の考え方があちがつていなか確認したり、覚えないで解けないところは暗記したりしてください。

目 次

第一講	少年たちの夏①（物語文）	p. 5
第二講	少年たちの夏②（物語文）	p. 10
第三講	春の数えかた（説明文）	p. 15
第四講	こうそうけんちく 高層建築と五重のとう（説明文）	p. 20
第五講	文の組み立て	p. 26
第六講	詩	p. 33
第七講	わすれ物・手紙（物語文）	p. 41
第八講	新聞記事を読み比べよう	p. 46
第九講	立場を決めて討論をしよう	p. 50
第十講	古文、漢文を読んでみよう	p. 56
第十一講	けい 敬語	p. 65
第十二講	注文の多い料理店①（物語文）	p. 71
第十三講	注文の多い料理店②（物語文）	p. 76
第十四講	ことばの教養	p. 86
第十五講	じゆく 熟語の構成、同音異義語、同訓異字	p. 91
第十六講	ベートーベン（伝記）	p. 99

第十七講	短歌①（百人一首）	105
第十八講	短歌②、俳句	115
第十九講	大造じいさんとがん①（物語文）	126
第二十講	大造じいさんとがん②（物語文）	134
第二十一講	宮沢賢治①（伝記）	141
第二十二講	宮沢賢治②（伝記）	146
第二十三講	人間の覚悟（説明文）	151
二十四講	花を食べる	157

第一講 ● 少年たちの夏①（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

さい。

六月にはいつすぐの土曜日だった。学校からの
帰り道、ぼくはまもるに計画をうちあけた。

「いかだいうても、ぼろ木を組んだような、ちやち
なやつじゃないがぞ。もつと、ずっと、かつこええ
がぜよ」

ぼくがそういうと、まもるは目をぱしばしゃせて
顔をむけた。まもるが、興味をしめした証拠だつた。
すぐのにつてきた。

「外海そとうみへでもでれそな、たとえば船室があるとか、
マストがあるとか、そんながかえ」

まもるは、色白のひたいに、汗あせを光らせていた。
やせつぱちのくせに、やたらと汗をかくやつだった。
「屋根ぐらいつけてもええねや」

「材料は、なにでつくるが」

まもるは、ちょっと不安そうにぼくを見た。
ぼくの頭の中では、すでにいかだはできあがつて

いた。名前さえ、もう決まっていた。名づけて、ド
ラゴンホース号だ。竜のような馬。雄々しく、たけ

だけしく、四万十川しまんとがわをとぶようにすべつていくのだ。
それは、ぼくらの高知県が生んだ偉人いじんであるところ
の、坂本龍馬の名前もひつかけている。これ以上の

名前があるとは思えない。

「竹さかでつくるがよ」

「竹？」

「そうぜよ。ひとりのりじやけん、ぼくとまもると
一そうちつつくる

「一そうちつ！」

まもるはそうちけんで、また目をぱしばしゃせた。
（横山 充男「少年たちの夏」より）

(1)

——線①「まもるに計画をうちあけた」とあります
が、Ⓐいつ、Ⓑどこでうちあけたのですか。
文中からそれぞれぬき出しなさい。

Ⓐ

Ⓑ

(2)

——線②「まもるはそうさけんで、また目をぱ
しばしさせた」とありますが、このときのまもる
の気持ちを表した言葉としてふさわしいものを次
の中から一つ選び、記号で答えなさい。

Ⓐ

興奮
こうふんⒷ 興味
きょうみ

Ⓒ 失望

Ⓓ 感動

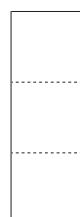


(3)

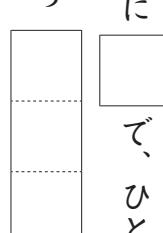
この文章は、どんな場面について書かれていま
すか。それを説明した次の文の□にあてはまる
言葉を、文中からぬき出しなさい。

「ぼく」がまもるに

で、ひとり



画をうちあけた場面。



をつくる計

【一題目】次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

「^①ちよつと、見ていいこうか」

とまもるは、緊張した声でいった。

ぼくはどちらでもよかつた。

まもるは、ぼくがはつきりとへんじをしないものだから、もじもじした。そのちよつとした間が、ぼ

5

くらをたかつさんのところへいけなくした。そばの竹林から、圭造がてきたのだ。

「たかつさん。こんなもんできえやろか」

とまもるは、懇願するようにいった。

③ その声を、圭造がききのがさなかつた。ぼくらのほうを見て、とたんに眉間にしわをよせた。

圭造はぼくらとのあいだに、それ以上近づくことをゆるさない空気を張った。

（横山 充男「少年たちの夏」より）

20

先をいろいろつかって、どんな線になるかためしてもららしいのだ。まもるは、その技術をそばで見たいらしい。

「ちよつとだけ、いこう」

圭造はそういながら、けずつた竹を五、六本さしだした。学校ではけつして見せない笑顔だったし、あかるい声だった。

「ああ、ちようどいいよ。わるいね。いつもてつだつてもらつて」

「かまへん、かまへん。どうせ、ひまなんやし」

たかつさんは、竹の先をペンのようにして、画用紙に線をいろいろらしい。それも太さのちがう竹

15

10

(1)

——線① 「ちょっと、見て いこうか」とあります
が、まもるは何を「見て いこう」といつている
のですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア たかつさんに線のいれたを学んでいる圭造
の様子。

イ そばの竹林で竹をけずつて いる圭造の様子。

ウ たかつさんが竹先をつかつて かいた絵。

エ たかつさんが竹先をつかつて 線をかく技術。



(2)

ウ ただ一人の友人であるたかつさんにおこられ
ないようとにと、おどおどしている人物。
エ 用事を言いつけるたかつさんに対して、いつ
もさからえない内気な人物。

ウ ただ一人の友人であるたかつさんにおこられ
ないようとにと、おどおどしている人物。

(3)

——線③ 「その声を、圭造がききのがさなかつ
た」とあります。そのときの圭造の気持ちとし
てふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で
答えなさい。

ア 二人が来てくれたのでうれしく思つて いる。

イ 呼んでいない二人がいるので不機嫌になつて
いる。

ウ ちょうど人手が足りていなかつたので、安心

して いる。



ア 「ぼく」やまもると同じ学校に通つて いるが、
学校では人と親しもうとしない人物。

イ 「ぼく」やまもると同じ学校に通つて いて、
いつも笑顔であかるい人物。

(2)

——線② 「圭造」とあります。「圭造」はど
んな人物ですか。ふさわしいものを次の中から一
つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」やまもると同じ学校に通つて いるが、

学校では人と親しもうとしない人物。

イ 「ぼく」やまもると同じ学校に通つて いて、
いつも笑顔であかるい人物。

第一講・確認テスト

正しい送りがなを選びなさい。

1 みずから

ア 自

ウ 自から

イ 自ら

エ 自ずから

2 かならず

ア 必

ウ 必らず

イ 必ず

エ 必ならず

3 すくない

ア 少

ウ 少ない

イ 少い

エ 少くない

4 もつとも

ア 最

ウ 最とも

イ 最も

エ 最つとも

5 あらわれる

ア 現る

ウ 現われる

イ 現れる

エ 現らわれる

第二講 ● 少年たちの夏②（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

友達と四万十川をいかだでくだる途中、「ぼく」は渕につつこんでいった。

一瞬、ふわっとうくような感じがして、どんと

A がきた。ドラゴンホース号は、天に昇るみ

たいに頭を持ちあげ、それから水面にばしゃっとお

5

ちた。ぼくはひつしでしがみついた。ドラゴンホー

ス号は、はげしくからだをふるわせて、いきなりし

づかになつた。ぼくとドラゴンホース号は、渕のそ

とにうかんでいたのだ。

息がはあはあしていった。その息の底から、なんだ

かめちゃくちゃうれしいものがこみあげてきた。

「おおおお！」
「やらいでか。やつたろやんけ」

渕をぬけたとたん、ぼくは声をあげた。安全を感

じたとたんにあげる、恐怖の叫びだつた。それはまた、B の雄叫びでもあつた。心臓が破裂しそうにいたかつた。ドラゴンホース号は、四万十川の川上に頭をむけていた。反転したわけだ。岬のさきで、びっくりした目でぼくを見ているまもると圭造がいた。

「やつたあ」と、まもるがいった。

「ほつほお」

と圭造が手をたたいた。

四万十川の流れに、ドラゴンホースがゆっくりと川下に頭をむけはじめていた。

ぼくは、まだ息をはあはあさせながらいつた。

「ままる。圭造。どうする。やるがか」「やる！」

まもると圭造は、岬からすつとんでいった。】

（横山 充男「少年たちの夏」より）

30

【】の部分は、どのような場面ですか。ふ

さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まもると圭造が「ぼく」が無事に渦からぬけたことを大人に知らせようと走っていく場面。

イ 「ぼく」の様子にしげきを受けて、まもると圭造もいかだで渦の中へ入ろうとする場面。

ウ 早く「ぼく」のいるところへ行こうと、まもると圭造がドラゴンホース号を川下にむける場面。

エ 「ぼく」が渦からぬけたのを喜んで、まもる

と圭造が岬から川へ飛びこむ場面。

(2)

——線「いきなりしづかになつた」とあります
が、ドラゴンホース号がしづかになつたのは、なぜですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(1)



に入る言葉としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア よろこび
エ 不安

イ 悲しみ
オ 衝撃

ウ 発見



【一題目】次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

太陽が、ちょうど真上のところにあつた。ぼくらは、三そこのドラゴンホースを見送ったあと、^①灯台の下で昼ごはんにした。あんぱんだけだつたけど、

ぼくらは満足していた。^{すいとう}水筒のお茶は、どんなジュースよりもおいしかった。

「ぼくな、中学は高知市にいくけれど、A」

とつせん、まもるがそんなことをいった。

「親の仕事をつぐのとちがうがか。歯医者は、金も

うけできるがやろ」

「ぼくは、絵を描きたい。歯医者は、おねえちゃん

になつてもろうたらええ

「たかさんみたいな、絵描きさんか」

「まもるも、いくんか。B

と圭造がつぶやいた。

さびしくなるなんて、圭造がいうとは思わなかつた。

「こうちゃんは、どんなおとなになりたいが」

15

10

5

と、まもるがまじめな顔できいた。
「ぼくは、まだ決めちょらん」

「おれか。おれは、ちゃんとしたおとなになる」「ちゃんとした?」

圭造は、さいごのパンのひと口をのみこんで、は

ずかしそうにいった。

「うん。なんしか、ちゃんとしたおとなや。ちゃんとした人間や」

ぼくは、圭造はいまでもちゃんとした人間だと思つた。

ぼくは、圭造はいまでもちゃんとした人間だと思つた。

「ちゃんとした人間か」

と、まもるはしみじみとつぶやいた。

「圭造は……」

ちゃんとして いるよといいかけて、⁽²⁾ぼくはこと

ばをのみこんだ。

そんなこと、ぼくが決めることがじゃない。

みやあ! と白いカモメが鳴き、ぼくらの上をど

んでいった。
（横山充男「少年たちの夏」より）

35

30

25

20

(1) — 線① 「灯台の下で昼ごはんにした」とあります。このときの「ぼくら」の気持ちがわかる言葉を、六字でぬき出しなさい。

(2)

A・Bに入る言葉としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 歯医者にはならんかもしけん
イ みんながんばつてゐな
ウ おれひとり、さびしくなるな

エ 絵描きさんにはならんかもしけん

A
B

(3)

【】の部分では、三人はどんな話をしていますか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

将来じょうらい
いう話。

(4)

— 線② 「ぼくはことばをのみこんだ」とあります。

ですが、それはなぜですか。文中の言葉を使って答えなさい。

になるかと

第二講・確認テスト

かくにん

送りがなのまちがっているものを選びなさい。

1 ア 起きる
ウ 当る
エ 表す

2 ア 新しい
ウ 楽しい
エ 美くしい

3 ア 断る
ウ 表す
エ 正す

4 ア 増える
ウ 交える
エ 営なむ

5 ア 断る
ウ 図る
エ 報る

第三講 ● 春の数えかた（説明文）

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

1 なぜ自然はこんなにうまくめぐつているのだ

2 なうか？ *生物学者にとつては当然興味をそそられる問題だ。

3 今年は寒かつたからサクラの開花はかなりおくれたが、暖い年にはふだんより早く花が咲く。5ことは確かである。

4 サクラは、冬の間からつぼみがふくらんでくる。その時期にはまだ寒いから、つぼみのふくらみは暖さによるものではない。そもそも暖くなつてからつぼみをふくらませ始めたのでは間に合わない。

5 このときにもう、来年の花が作られはじめているのである。サクラの花は暑い夏に作られて、寒いときにふくらみ、暖くなつて開くのだ。その *丹念な *用意周到さ！

いずれにせよ、植物はちゃんと季節を知つている。そして、一年のきまつた時期に花を咲かすよう、厳密なタイム・スケジュールが組まれている。

（日高 敏隆「春の数えかた」より）

*生物学者＝動物や植物などを研究する学者。

*丹念＝心をこめてていねいにすること。

*用意周到＝用意が十分にととのつてていること。



(1) この文章を次のように大きく三つに分けるとすると、どのように分けるのがよいですか。それぞれ、段落番号を答えなさい。

・一つ目（話題の提示）

・二つ目（くわしい説明）

・三つ目（まとめ）

(3)

次の一文を文中にもどすとすると、どの段落の最初にもどすのがよいですか。段落番号を答えなさい。

・じつはサクラが花の芽を作るのは、前年の夏である。



(2)



A B に入る接続語としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

さい。

ア だから イ また ウ たとえば
工 では オ けれど



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

1 なぜ自然はこんなにうまくめぐつているのだろうか？ *生物学者にとつては当然興味をそ

られる問題だ。

2 今年は寒かつたから、⁽²⁾サクラの開花はかなりおくれたが、暖い年にはふだんより早く花が咲く。

5

だから、寒い、暖いが開花の時期をきめていることは確かである。

3 けれどサクラは、冬の間からつぼみがふくらんでくる。その時期にはまだ寒いから、つぼみのふくらみは暖さによるものではない。そもそも暖くなつてからつぼみをふくらませ始めたのでは間に合わない。

4 じつはサクラが花の芽を作るのは、前年の夏である。このときにもう、来年の花が作られはじめているのである。サクラの花は暑い夏に作られて、寒いときにふくらみ、暖くなつて開く

15

10

5

のだ。⁽³⁾その*丹念な*用意周到さ！

いずれにせよ、植物はちゃんと季節を知つている。そして、一年のきまつた時期に花を咲かすよう、厳密なタイム・スケジュールが組まれている。

（日高敏隆「春の数えかた」より）

*生物学者＝動物や植物などを研究する学者。

*丹念＝心をこめてていねいにすること。

*用意周到＝用意が十分にととのつてていること。

20

(1) 線①「なぜ自然是こんなにうまくめぐつているのだろうか?」とあります。この問い合わせに対する答えを述べた次の文の□にあてはまる

言葉を、文中からぬき出しなさい。

植物は□を知つていて、厳密な□が組まれているから。

植物は□を知つていて、厳密な□

が組まれているから。

(2) 線②「サクラの開花」とありますが、「開花」の説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サクラのつぼみは暖くなつてからふくらみはじめる。

イ 開花の時期は暖いと早まるが、つぼみのふくらみには関係ない。

い。

ウ サクラのつぼみは寒い冬の間はふくらまな

工 開花の時期は、気温の高低によつてきまるわけではない。

(3)

線③「その丹念な用意周到さ!」とあります。どのような点が「用意周到」なのですか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

サクラは□の花のために、□を作りはじめている。

の夏には

□

□

□

第三講・かくにん確認テスト

次の□に「不」「無」「非」「未」を入れて言葉を完成させなさい。

1 □色

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

2 □常識

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

3 □来

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

4 □足

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

5 □安

ア 不 イ 無 ウ 非 エ 未

第四講 ● 高層建築と五重のとう（説明文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

1

① 日本で最古の五重のとうは、奈良県の法隆寺

にあり、千三百年以上前のものといわれている。

このように五重のとうの歴史は古いが、それが地しんや強風でたおれたという話はめったに聞かない。② 昔から伝えられた技術や方法は、科学の発達した今日でも、意外に合理的なものである。では、五重のとうには、地しんや強風にたえるための、どんなひみつがかくされているのだろうか。

4

五重のとうは、木造の建物である。ところで、自然のじゅ木は、やわらかくて、少し曲げたらいでは折れない。この、折れないでしなうという性質を、「しなやかだ」という。つまり、五

10

5

重のとうの材料は、しなやかな木材である。

3

五重のとうには、木材の組み合わせ方、すなわち木組みにもくふうがある。とうの中心に、一階から五階まで通した太い柱があるが、それ以外は二つの階にわたって通してある柱はない。一階ごとに独立の、しかもかなり複雑な木組みをつくって、ただ乗せてあるだけである。このようには、各階が固く結び付いていないので、外から力がかかたときも、つぎ目がこわれるところなく、建物全体がしなう。すなわち、五重のとうは、しなやかなつくりをもつ建物である。

20

さらに、五重のとうには、横にはり出した屋根を支える仕組みにもひみつがある。各階の柱は、上層からの重さと屋根の重さを支えているが、そのつくりが片仮名の「イ」に似ていて、かたむいたてんびんのような形になっている。

25

15

しかも、柱のつぎ目が、ちょうどてんびんの支点のようゆるく結び付いているために、屋根は、鳥が羽ばたきをするように、ゆっくり上下にゆれるのである。これも、一種のしなやかさである。

高木 隆司「高層建築と五重のとう」より

(2)

——線② 「昔から伝えられた技術や方法」とあります
が、この文章では五重のとうのどんな点に注目して
いますか。□(あ)えにあてはまる

え	う	い	あ		う	い	あ
のひみつ	のひみつ	のひみつ	のひみつ		のひみつ	のひみつ	のひみつ

性質 せいしつ

え

(1) 線①「日本で最古の五重のとう」は、どれぐらい前のものですか。文中からぬき出しなさい。

(3)

3 段落の中で、筆者が特に注目しているのは
どんなところですか。ふさわしいものを次の中か
ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大部分の柱が、複雑な木組みになつて
いるところ。

イ 大部分の柱が、一階ごとに独立して
いるところ。

ウ とうの中心に、一階から五階まで通した太い
柱があるところ。

エ 五重のとうの各階が、固く結びついて
いるところ。



一題目

5

ところで、建物全体がしなつたり、屋根がゆれたりすると、木組みには、どうしてもわずかなすき間ができる。すると、木組みのあちこちで木材どうしがこすれ合って、ギシギシときしむことになる。^①五重のとうがたれない理由は、実はこのゆれやすさと、きしみにあるのである。

5

6 五重のとうに、地しんや風などのはかいの力がかかつて、ゆれ始めたときのことを考えてみよう。とうのしなやかさと屋根のつくりのためゆれの勢いがとうの各部分に伝わっていく。

10

ゆれの勢いは、建物全体としては大きくても、それがどうの各部分に分けられたとき、各部分のゆれの勢いは小さくなる。

A

このゆれ

は、木組みのきしみのために、勢いが弱められてしまう。これは、ぶらんこがすぐ止まってしまうのと、ちょうど同じ理由である。

B

、五重のとう

15

8

も無事だった。

全体がしなやかさをもち、木組みにきしみが生じることが、地しんや強風に対する強さを生む——^②これが五重のとうのひみつである。

30

では、地しんや強風のときでも、木材が折れたり、木組みが外れるようなことは起きないのである。自分が建てた五重のとうの中に入つてみた人の話をしようかいしよう。ギーギー、バリバリと木材のきしむ音がし、今にもたおれてしまうのではないかと思うほど、建物全体が弓なりにかたむく。中心の高い柱は、上のはしが大きく円をえがき、根もとのところでは、土台とこすれ合って、ゴボゴボとお湯がにえたぎるような音をたてるのだそうだ。しかし、とうも、この人も無事だった。

25

7

全体がしなやかさをもち、木組みにきしみが生じることが、地しんや強風に対する強さを生む——これが五重のとうのひみつである。

（高木 隆司「高層建築と五重のとう」より）

20

(1) 線①「五重のとうがたおれない理由」を説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

地しんや風などの

が

かかつても、

のために勢いが弱め

られるから。

(2)

にあてはまる言葉としてふさ

わしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答

えなさい。

- ア ところで イ しかし
ウ こうして エ さらに

A

B

(3)

線②「これ」は、何をさしていますか。文中からさがし、初めと終わりの五字を答えなさい。
(、や。をふくまない。)

さ

第四講・かくにん 確認テスト

次の□に「不」「無」「非」「未」を入れて言葉を完成させなさい。

1 □可能

ア 不 イ 無 ウ 非 工 未

2 □解決

ア 不 イ 無 ウ 非 工 未

3 □理解

ア 不 イ 無 ウ 非 工 未

4 □服

ア 不 イ 無 ウ 非 工 未

5 □日常

ア 不 イ 無 ウ 非 工 未

第五講 ● 文の組み立て

1、主語と述語

文は、大きく分けて【主語】と【述語】から成り立っている。

【主語】

「だれが（は）・何が（は）」に当たる言葉。

【述語】

「どうする」・「どんなだ」・「何だ」に当たる言葉。

主語	述語（文末）
うは	どうする
うが	どんなだ
うも	何だ

例
兄が行く。
花がきれいだ。
父は会社員だ。
「だれは」 + 「何だ」
「だれが」 + 「どうする」

1

次の文の主語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1

この ^ア は ^イ みは ^ウ よく ^エ 切れる。

2

真夏の ^ア 太陽の ^イ 光が ^ウ 照りつける。

3

ここには ^ア 每年 ^イ わたり鳥が ^ウ 来る。



2 次の文の述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(1) 日本は 海に 囲まれた 国です。

(2) 妹は 来年 小学生に なる。

(3) ここに あつたのか、自転車の カギは。

(1) 中学生の 兄は サッカー部の キャプテン
だ。

主語
述語

3 例にならって、次の文の主語と述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、主語・述語がない場合は、×と答えなさい。

(2) お祭りの 行列が ゆっくりと 通り過ぎる。

主語
述語

(3) カギをなくして夜まで 家に入れなかつた。

主語
述語

(4) ぼくがいちばん好きな教科は国語です。

主語
述語

(5) とってもおいしいね、このケーキは。

主語
述語

4

次の文の主語・述語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、主語・述語がない場合は、×と答えなさい。

(1) 父は 毎朝 電車で 新聞を 読む。

主語 述語

(2) 雪山で 見た 女の 顔は 白かつた。

主語 述語

(3) 風で 飛ばされない よう テントに ロープ

主語 述語

(4) この 町には 大きな 図書館が ない。

主語 述語

(5) 駅前の 白い 建物は 高校の 校舎です。

主語 述語

(6) 落ち葉を ふみながら 山道を ゆっくり 歩いた。

主語 述語

2.

修飾語
しゅうしょくご

「どんな」・「どのように」のように、文の中でほかの言葉をくわしく説明する働きを持つ。

例 赤い花がさく。

花がきれいにさく。
ほかにも、「いつ」・「何を」・「何の」・「何で」などに当たる言葉も修飾語である。

1 次の文から修飾語をすべて選び、記号で答えなさい。

(1)

屋根にうつすらと白い雪が積もった。

(2)

馬が草原をさつそうとかける。

[2] 次の一線の言葉が修飾している言葉をぬき出しなさい。

(3) えのぐで、大きな犬をかく。
 えのぐで、大きく犬をかく。
 えのぐで、大きく犬をかく。

(2) 明日までのわり引きがある。
 明日までのわり引きがある。
 明日までのわり引きがある。

(1) 元気に顔を見せる。
 元気な顔を見せる。
 元気な顔を見せる。

[3] 次の文の□の言葉が修飾している言葉をそれ選び、記号で答えなさい。

海岸できれいな貝殻を一つ拾つた。
 川でつかまえた魚を学校で飼う。
 ちょうど始業のベルが鳴つたところだ。

4 次の文の□の言葉を修飾している言葉をそれ選び、記号で答えなさい。

(1) 山道の大きな木の下で雨宿りをした。

(2) すぐにまどの近くの席が空いた。

(3) 休日の昼間の学校はとても静かだつた。

第五講・かくにん 確認テスト

次の□に「性」「然」「的」「化」を入れて熟語じゆごを作りなさい。

ア 性	ア 性	ア 性	ア 性	イ 病
イ 然	イ 然	イ 然	イ 然	
ウ 的	ウ 的	ウ 的	ウ 的	
工 化	工 化	工 化	工 化	

5
ア
性
温
暖

おんなん
□

イ
然
ウ
的
工
化

第六講 ● 詩

1、詩の種類

① 形式上の分類

- ・定型詩：きまつた音数をくり返す詩。
- ・自由詩：一行の音数にきまりがなく、自由な形で書かれた詩。

② 用語上の分類

- ・文語詩：昔の言葉（文語）で書かれた詩。
- ・口語詩：現在使われている言葉（口語）で書かれた詩。

2、詩の主な表現技法

① 比喻

ひよげんぎほう
……ものごとをほかのものにたとえる技法。

② 擬人法

ぎじんぽう
……人間でないものを人間のようにたとえる技法。

③ くり返し

くり返し：同じ言葉をくり返す技法。

④ 倒置法

とうちほう
……言葉の順序を逆にして、意味を強める技法。

⑤ 体言止め

じみんじめ
……行の終わりを名詞（ものやことがらの名前）で止める技法。

⑥ 呼びかけ表現

よびかけひょう
……



一題目 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

ふるさと

室生
むろう

犀星
さいせい

雪あたたかくとけにけり
しとしとしとと融けゆけり
ひとりつしみふかく
やわらかく
木の芽に息をふきかけり
もえよ

a のうすみどり

a のうすみどり
もえよ

(3) この詩は何をよんだ詩ですか。□にあてはま
る漢字一字を、それぞれ考えて答えなさい。

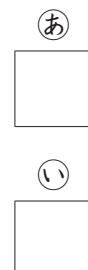
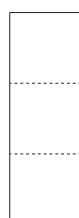
□から
□へのうつり変わり。

10

5

(2)

二か所の□aに共通して入る言葉を、詩の中から三字以内でさがし、ぬき出しなさい。



(1) この詩のⒶ形式と、Ⓑ使われている言葉(用語)を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 定型詩 イ 自由詩
ウ 文語詩 エ 口語詩

一題目 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

い。
 よろこびの時は短かい
 夢よりもなおも儻ない
 束の間もこれより長い
 よろこびを時が持ち去る
 かなしみを時が置き去る
 かくてこの心に残る
 かなしみが心にしみる
 何時までも 明日も明後日も

時

堀口

大學

5

(1) この詩に用いられている表現技法を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----|---|------|---|------|
| ウ | ア | 体言止め | イ | くり返し |
| 倒置法 | | | | |
| | | | 工 | 比喩 |

(2)

——線「心に残る」とあります。何が心に残るのですか。詩の中から五字以内でさがし、ぬき出しなさい。



三題目 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

準備
じゅんび

高階
たかしな

杞一
きいち

1 A のではない

① 準備をしているのだ

飛び立っていくための

2 B のではない

② 測ろうとしているのだ

風の向きや速さを

3 初めての位置

初めての高さを

こどもたちよ

4

おそれてはいけない

この世のどんなものもみな

5

落ちることにより
初めてほんとうの高さがわかる
うかぶことにより
初めて
雲の悲しみがわかる

「初めて」から出発するのだから

(1)

A・Bに入る言葉としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 怒つている ウ 待つてはいる イ 見てはいる
エ 笑つてはいる



(2)

——線①と——線②で使われてはいる表現技法を
答えなさい。



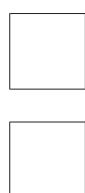
(3)

第3連と第4連の説明としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

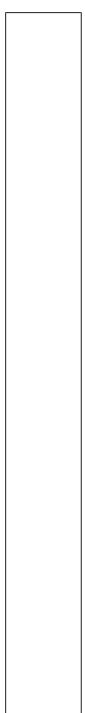
ア 同じような表現をならべることで、まとまりごとにリズムを出している。
イ 同じ言葉をくり返すことで、「初めて」の大切さを強調している。

ウ 行末を名詞で終えることで、出発の風景に余情をあたえている。

エ 伝えたい相手を明らかにし、「初めて」をおそれてはいけないというメッセージを発してい
る。



(4) この詩の中から、擬人法が使われてはいる行を一
か所さがし、ぬき出しなさい。



四題目

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

忘れもの

高田たかだ

敏子としこ

1

入道雲にのつて

夏休みはいつてしまつた

「サヨナラ」のかわりに

すばらしい夕立をふりまいて

2

けさ 空はまっさお

木々の葉の一枚一枚いちらいが

あたらしい光とあいさつをかわしている

3

だがキミ！ 夏休みよ

もう一度 もどつてこないかな

忘れものをとりにさ

4

迷子まいごのセミ

さびしそうな麦わら帽子
それから ぼくの耳に
くつついてはなれない波の音
ぱうし

(1) — 線「サヨナラ」のかわりに」とあります。が、
どのようなことが起きたのですか。それを説明し
た次の文の□にあてはまる言葉を、詩の中から
ぬき出しなさい。



□ の終わりの日に、



が

ふつたということ。

(2) 第4連の説明としてふさわしいものを次の中
から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏休みが置いていった「忘れもの」を表して
いる。

イ 夏休みといっしょに去つていった夏の思い出
を表している。

ウ 人間でないものを人間のようにたとえて表現^{ひょうげん}
している。

エ よびかけの表現を使って、作者の気持ちを
うつたえている。



(3) この詩の主題としてふさわしいものを次のなか
ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア たくさん思い出ができた夏休みのすばらし
さ。

イ 夏休みが終わるころの空や木々などの風景の
美しさ。

ウ 夏休みが終ることへのどうしようもないさ
びしさ。

エ 夏休みがもどつてこないことへのいらだち。



第六講・かくにん 確認テスト

次の□に「性」「然」「的」「化」を入れて熟語じゆごを作りなさい。

1 強

2 一本

3 自

4 映画

ア 性

ア 性

ア 性

ア 性

イ 然

イ 然

イ 然

イ 然

ウ 的

ウ 的

ウ 的

ウ 的

工 化

工 化

工 化

工 化

5 感受

ア 性

イ 然

ウ 的

工 化

第七講 ● わすれ物・手紙（物語文）

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

めぐみ

恵の家は、団地の東の住宅地にあります。純子の家は、団地の西外れにならぶ棟です。すぐ先の十字路が、この団地のほぼ中心ですが、十字路を向こうへわたって、まっすぐ五、六分ほど行くと、純子の家に着くのです。

「早く行かなくちや。リボンーフラワーの作り方、最初から教わりたいものね。」

ひとり言を言いながらかけ出し、くぼみにたまつた雨水をとびこえた恵の足は、一しゅん、^①すくみまし

【右手から十字路へと、勢いよく走ってきた白い自動車。そして、目の先の横断歩道へちょこちょこと出ていく、二才ほどの男の子。】

恵が男の子をかかえこんでとびのくのと同時に、十字路の中ほどで、自動車が、はげしいブレーキの音を立てました。】

「あぶない！ 小さい子とは、ちゃんと手をつないでいてくれよつ、お姉ちゃんのくせに。」

運転手が、顔をつき出してどなりました。

（この子のお姉ちゃんじやないわよ、わたし。）

言い返したい気もしましたが、どなられたはら立ちよりももつと熱いものがこみ上げて、くちびるがふるえていました。

「あぶなかつたのよ、ぼく。ほらね、あの信号が赤いときは、ぜつたいに、わたつていつちやだめなのよ。」

ひと息に言つてから、恵は、少し気持ちを静めて、男の子に話しかけました。

（古世古 和子「わすれ物」より）

10

5

25

20

15



(1) この文章は、だれが、どこへ行こうとしていたときの話ですか。

だれが

どこへ

(3) 【】の部分では何が起きたのですか。□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

男の子が勢いよく走ってきた

ので、恵が

にひかれそうになつた

(2)

——線①「すくみました」とあります。どう

いうことですか。ふさわしいものを次の中から一
つ選び、記号で答えなさい。

- ア どうしようかとまようこと。
イ こわさで、動けないこと。
ウ こわさで、ふるえること。
エ こわさから、後ろへさがること。



(4)

ことで男の子を助けた。

【】

——線②「もつと熱いもの」とはどんなもので
すか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記
号で答えなさい。

- ア 危険な出来事から受けたしょげき。
イ 男の子に対してのいかり。
ウ 男の子をほうつておく親に対してのいかり。
エ どなつた運転手に対してのうらみ。



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

「今日は八月十五日だ。終戦記念日だ。」

おじいちゃんは、手に持った手紙に目をやつたまま言つた。

「終戦記念日つてのは、戦争が終わつた日のことなんだ。おじいちゃんは、日本が第二次世界大戦を終えた

5

日、九州の病院にいたんだ。兵隊として中国の南部にいたんだけど、大砲のたまのかけらがかたに当たつて大けがをして、中国から、小倉の陸軍病院に送り帰されたんだ。それから三ヶ月後に、戦争が終わつた。」

10

大けがをして、中国から日本へ送り帰されることが決まつた日、同じ戦場にいた友達が、^①ないしょで、手紙をおじいちゃんに預け、

「もし、ぼくが生きて帰れなかつたら、この手紙をぼくの両親にわたしてくれよ。」

「戦場から、家族や友達に出す手紙は、すべて、ど

15

んなことが書いてあるのかを調べられるのだと、おじいちゃんはタケオに説明してくれた。

「戦争に反対するようなこととか、いくじのないことを書いてある手紙は、取り上げられてしまうから、兵隊たちは、手紙には、本当のことは書けないんだ。」

その友達は、自分が生きて帰れないだろうと予感して、ありのままのことを書いた手紙、おじいちゃんにそつと預けたのだった。

もし、^②いろんな事情^{じじょう}できみの両親にわたせなかつたら、どうしたらいいのかと、おじいちゃんが、その友達に聞くと、

「そのときは、きみが読んでからすてくれ。」

友達は、そう言つたそうだつた。

「いろんな事情つて、どんなこと？」

と、タケオは聞いた。

例えば、自分のけがが治らなくて、このまま死んでしまつたり、友達の両親と会えないまま、何年もたつてしまつたりしたときだと、おじいちゃんは言つた。

（宮本輝「手紙」より）

(1) おじいちゃんがタケオに戦争の話をしたのはいつですか。

(2) 線① 「ないしょで」 手紙をわたしたのはなぜですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戰場から手紙を出すことは許されなかつたから。
イ 戰場から手紙を出すには許可が必要だつたから。
ウ 戰場から個人的^{こじんてき}な手紙は出せなかつたから。
エ 戰場からの手紙はすべて調べられたから。

(3) 友達は手紙にどのようなことを書いていましたか。文中から八字でぬき出しなさい。

(4) 友達はどのような気持ちでその手紙を書いたのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(5) 線② 「いろんな事情」 の内容^{ないよう}がよく表れている一文を文中からさがし、初めの五字を答えなさい。

第七講・確認テスト

次の中から主語を選びなさい。

1 僕の カつて いる ネコは かわいい。

2 君こそ この クラスの 学級委員長に わ

ふさわしい。

3 その 本は とても おもしろいよ。

4 昨日は だいじょうぶだった、 きみの

お姉さんは。

5 白い 花が もうすぐ しおれてしまい

そうだ。

第八講 ● 新聞記事を読み比べよう

新聞記事の構成

- ①トップ記事 第一面の目だつところに置かれた、最も大切な記事。
 - ②見出し ひと目でわかるように、記事の内容を短くまとめた言葉。
 - ③リード 本文の内容を短い文章でまとめたもの。
 - ④本文 できごとの内容がくわしく書かれた、記事の文章。
 - ⑤写真・図・解説 記事の内容をよりくわしく伝えるためのもの。
- 同じ話題をあつかった記事でも、見出しの内容や、記事・図・写真などの大きさや配置により、印象がことなる。

一題目

次の二つの新聞記事を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

・A社の新聞記事

試験期間終了 徴収金3412万円

山梨、静岡両県が協力し、富士山で十日間、入山料の試験徴収を行つた。予想を上回る賛同があり、計約3412万円集まる結果となつたが、本格的導入に向けて残された課題は多い。

今回の試験期間では、登山者を対象に一人千円の協力金を求める、大勢の協力を得る結果となつたが、金額に関しては「ちょうど良い」「もつと高くない」など、様々な声が寄せられている。また、徴収金の具体的な使い道や、入山料を任意あるいは強制にするのか、などについても発表されておらず、検討すべき課題は多く残されている。



・B社の新聞記事

富士山協力金 3412万円

世界文化遺産の富士山で、試験的に行われた「富士山保全協力金」は、十日間で3万4327人が計約3412万円を支払った。予想を大幅に上回る結果となつた。

富士山では、「環境保全の資金確保」を目的として、入山料として、山頂を目指す登山者を対象に、一人千円の支払いを呼びかけた。支払いは任意ですが、予想以上に関心

が高く、多くの協力者が得る結果となつた。山梨、静岡両県では、本格的導入に向けて、登山者からの意見を参考に、今後いつそう力を入れたいと語っている。

（出題者書きおろしによる）

(1)

——線「山梨、静岡両県が協力し」から始まる部分は、新聞記事の構成上、どのようによばれていますか。ふさわしいものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見出し

イ コラム

ウ リード

エ 本文

(2)

B社の新聞記事の□にあてはまる言葉としてふさわしいものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 富士山 世界文化遺産登録決定
 イ 予想上回る 3万4000人が協力
 ウ 徴収金 3412万円集まる



(3)

B社の新聞記事に写真をのせるとしたら、どのような写真がよいですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 入山料を支払う登山者たちの写真。
 イ 富士山の美しさがわかる遠景写真。
 ウ 富士山のゴミを拾う登山者の写真。



(4) 二つの記事を読み比べたとき、内容的にどのようないちがいがありますか。そのちがいをまとめた次の文の（　）Ⓐ・Ⓑにあてはまる言葉を、新聞記事の中の言葉を使ってそれぞれ答えなさい。

二つの記事はともに、富士山の入山料の徴収を試験的に行つたことについて書かれているが、A社の新聞記事は（Ⓐ）ことを中心に、B社の新聞記事は（Ⓑ）ことを中心に記事をまとめている。

Ⓐ

Ⓑ

--	--

第八講・確認テスト

次の中から述語を選びなさい。

1 今日は 楽しみにしていた ぼくの
日だ。
誕生

2 私は 青い 花を 摘んで帰った。
誕生

3 とても 気になるよ、 誰が 来たのか。

4 交差点で ぼくは 友だちと 待ち合った。

5 私は まちがつて 電話をかけてし
まつた。

第九講・立場を決めて討論をしよう



一題目 次の討論の一部を読んで、あとの問い合わせに答えましょう。

司会 これから討論を始めます。論題は「」です。この討論は黒板に書いた順序で進めます。

それではまず、賛成グループから主張してください。

賛成 ぼくたちは、論題に賛成です。賛成の理由は三つです。一つ目は、くり返し使って環境に良いからです。二つ目は、飲み物の温度を保てるからです。三つ目は、自分に合った量を用意できるからです。以上の理由から、ぼくたちは論題に賛成します。

反対 わたしたちは、論題に反対です。その理由は

三つです。一つ目は、水とうは空になつても重くてかさばるからです。二つ目は、清潔に保つために手間がかかるからです。三つ目は、こわしたりなくしたりすることがあるからです。したがって、わたしたちは論題に反対です。

〈作戦タイム〉相手への質問を考える。

司会 反対グループは、賛成グループの理由に 対して、質問してください。

反対 水とうはくり返し使って環境に良いという理由を挙げていましたが、こわれたらごみになってしまいます。一方、ペットボトルは、リサイクルできます。環境に良いことは水とうだけの良さではないと思いますが、どうですか。

賛成

七月一日の新聞によると、ペットボトルにはリサイクルされていないものが十万トン以上あるそうです。くり返し使うことのできる水のほうが環境に良いと思います。……

〈教科書書きおろしによる〉

(1)

にあてはまる今回の討論の論題としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 校外学習に飲み物を持っていくときは、水を使うべきである。

イ 校外学習に飲み物を持っていくときはの容器は、自由にすべきである。

ウ 校外学習に飲み物を持っていくときは、ペットボトルを使うべきである。



(2)

——線 「水とうはくり返し使って環境に良いと
いう理由を挙げていましたが」とあります
が、これと同じ立場から挙げられているほかの理由を二
つぬき出しましょう。

(3)

賛成グループが自分たちの主張の正しさを示すために、理由のうらづけとなる具体的な事実を述べている一文をぬき出し、初めの五字を答えましょう。



二題目

いくときは、水とうを使うべきである。」という論題に対する西村さんの意見文です。これを読んで、あとの問いかに答えましょう。

わたしは、「校外学習に飲み物を持つていくときは、水とうを使うべきである。」というろん題に賛成です。

賛成する理由は三つあります。

一つ目は、水とうを使うことは、かん境に良いからです。例えば、ペットボトルは、中身を飲んだ後はごみになってしまいます。それに対して、水とうはくり返し何度も使えます。

二つ目は、水とうには、飲み物の温度を保てるものがあるからです。冷たい飲み物は冷たいまま、温かい飲み物は温かいまま持つていくことができます。

三つ目は、水とうは、一人一人もようがちがうので、ほかの人の飲み物とまちがえることがないから

です。

、わたしは、校外学習に飲み物を持つていくときは、水とうを使うべきである。」という論題に對して、どのような立場から意見を述べていますか。二字で答えましょう。

〈教科書書きおろしによる〉

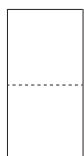
(1)

西村さんは、「校外学習に飲み物を持つていくときは、水とうを使うべきである。」という論題に對して、どのような立場から意見を述べていますか。二字で答えましょう。

(2)

にもつともよくあてはまる言葉を次の
中から選び、記号で答えましょう。

- ア しかし
- イ したがつて
- ウ また
- エ なぜなら



(3) 西村さんが意見の理由として述べていること
は、どうですか。三つ答えよう。

(4) 「校外学習に飲み物を持つていくときは、水とうを使うべきである。」という論題に対し、西村さんは反対の立場に立つて意見文を書きましょう。ただし、「わたし（ぼく）は、このろん題にうです。」という文で書き出すこと。

--	--	--

第九講・確認テスト

かくにん

次の二重傍線部が修飾している箇所を選びなさい。

5 少し ややこしい

やさしく 話してくれた。

ややこしい 話を友人が

わかり わかる

1 私は 両手でたくさんの花を持った。

2 友人は いつも弟の面倒を見てイ

3 ぼくの学校の休み時間は 毎日決

まつて いる。

4 怒った 友人がいきなりボールを投げた。

第十講・古文、漢文を読んでみよう

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

今は昔、竹取のたけとりおきな①といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことを使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹たけなむ一筋ひとすじありける。あやしがりて、寄りて見るに、つつの中光りたり。それを見れば、三寸さんしんばかりなる人、いとうつくしうるたり。

（「竹取物語」より）

（意味）
昔、竹取のおじいさんという人がいました。野や山に分け入って竹を切り取っては、いろいろなことに使っていました。名前を、「さぬきのみやつこ」といいました。

ある日のこと、竹林の中に、根元の光っている竹が一本ありました。おじいさんが不思議に思つて近よつて見てみると、竹の中が光っています。中を見ると、手のひらほどの小さな人が、たいへんかわいららしい様子ですわっています。

（教科書書きおろしによる）



(1) 線①「おきな」とは、どういう意味ですか。

〈意味〉の文章中からぬき出しましょう。

(2) 竹取のおじいさんの名前は何ですか。

(3) 線②竹取のおじいさんが不思議に思ったのは、どんなことでしたか。〈意味〉の文章中の言葉を使って答えましょう。

(4) この文章の内容としてもつともふさわしいものを次の文から選び、記号で答えましょう。

ア 竹取のおじいさんの願いがかない、竹林の中で子どもをさすからることができた。

イ 竹取のおじいさんは、竹の中にはわっている手のひらくらいの大きさの人を見つけた。

ウ 竹取のおじいさんは、手のひらくらいの大きさの人を、こつそり竹の中で育てていた。

(5)

この文章をふくむ物語がもとになつてできたお話を次の文から選び、記号で答えましょう。

ア イ
浦島太郎
一寸法師
ウ
かぐやひめ

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。



（「平家物語」より）

祇園精舎のかねの声、
諸行無常のひびきあり。
娑羅双樹の花の色、
盛者必衰のことわりをあらはす。

おこれる人も久しからず、

ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者もつひにはほろびぬ、

ひとへに風の前のちりに同じ。

（意味）

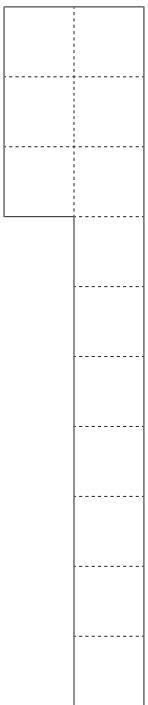
祇園精舎という寺のかねの音は、全てのものは
うつり変わっていくものだという真理を、ひびきの
中にこめています。

娑羅双樹という花の色は、今は勢いのある人でも
必ずおどろえるという真理を表しています。

おごり高ぶっている人でも、ずっとそのままでい
ることはできません。ちょうど、短くてはかない春
の夜の夢のようなものです。

勇ましく強い者も、最後にはほろんでしまいます。
それは全く、風にふき飛ばされていくちりのような
ものなのです。

（教科書書きおろしによる）



(1)

——線①「盛者必衰のことわり」とはどういうことですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 強い人の勢いはずっと変わらないということ。

イ 勢いがある人もいつかはおとろえるということ。

ウ 勢いのある人は今を大切にしているということ。



(2)

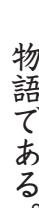
——線②「全てのものはうつり変わっていくものだ」とあります。このことをどんなものにたとえて表していますか。〈意味〉の文章中から二つ、五字と十三字でぬき出しましょう。



ウ 昔から伝わる伝説をもとにした作り話である。



イ 作者が身近な出来事について思つたことを書いている。



ア 実際にあつた戦いなどをもとに書いて書かれた物語である。



イ ひらがなだけを使って分かりやすく説明している。

ウ 七音・五音を基本とした独特のリズムがある。

(3)

この古文の特徴としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 語りかけるような言葉で親しみやすさを表している。

三題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山際やまぎわ、少し明かりて、紫むらさきだちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

（清少納言「枕草子」より）

5

（意味）

春はなんといつても明け方。だんだんとあたりが白しらんで、山のすぐ上の空が少し明るくなつて、紫むらさきがかつた雲が細くたなびいている様子。

夏は夜。月が出ていればもちろんよい。やみ夜でも、ほたるがたくさん飛びかつている様子。また、ほんの一つ二つ、ほのかに光つて飛んでいくのもよい。雨などがふるのも、またよい。

（教科書書きおろしによる）

5

(1) 作者がよいと思っている、春の時間帯を答えましょう。

(2) 線① 「白んで」とあります。どうなると

いうことですか。もつともふさわしいものを次の
中から選び、記号で答えましょう。

ア 空がどんどん白くなっていること。

イ 夜が明けて、空が明るくなること。

ウ 月が出て、白い光を放っていること。

(3) 線② 「たなびいている」様子を表している

ものとしてもつともふさわしいものを次の
中から

選び、記号で答えましょう。

ア 空全体に厚くたちこめている。

イ 横に尾おを引いたようにうかんでいる。

ウ 小さく細切れになつて散つている。

(4) 線③ 「よい」という意味の言葉を古文の中

からぬき出しましょう。

四題目

次の漢詩を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

春 晓
孟 浩然

春眠 晓あかつき 覚えず
處處しょしょに 喳鳥①ていちょう を 聞く
夜來やらい 風雨ふうう の 声こゑ
落つる こと 知る 多少たしよう



5

〈意味〉

春の明け方

春のねむりのこここちよさに、

夜が明けたのも気がつかなかつた。
②

あちこちから、

鳥の鳴き声が聞こえてくる。

昨夜、③風雨の音おとが聞こえていた。

花は、ittai、どれくらい

落ちたのであるうか。

〈意味〉は教科書書きおろしによる

5

(1) この漢詩は、どんな季節の、どんな時間帯のことを表していますか。

(2) 線①「啼鳥」とは何のことですか。〈意味〉

の中からぬき出しましよう。

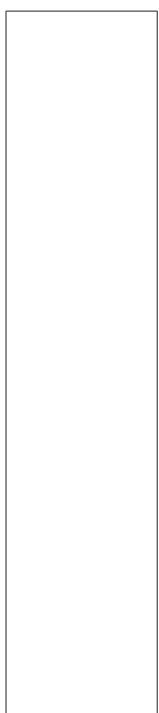
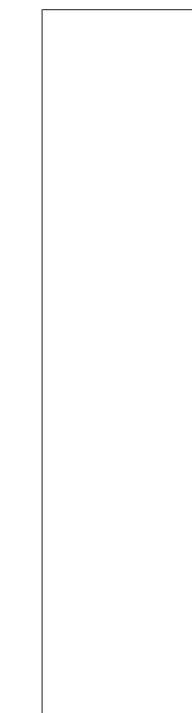
(5) この漢詩の特徴^{ちよう}としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 春の明け方のここちよさを、周りから聞こえてくる音を通して表現している。

イ 春の明け方のここちよさを、目で見た花の色のあざやかさで表現している。

ウ 春の明け方のここちよさを、はだに感じるあたたかさをもとに表現している。

(4) 線③「風雨の音」が聞こえたことで、作者はどうなことを気にかけていますか。〈意味〉の中の言葉を使って答えましょう。



第十講・確認テスト

かくにん

次の二重傍線部が修飾している箇所を選びなさい。

1あの青い車はぼくの父親のものだ。

2校庭に赤いチューリップをみんなで植えた。

3私の父はあの大きいビルを設計した。

4友だちとけんかしたぼくはとぼとぼ家に帰った。

5青い服の女性が私の姉だ。

第十一講・敬語

◆敬語の種類◆

① 尊敬語(そんけいご)：話し相手や、話題になつてゐる人に敬意を表すため、その人に関わることを高めて言う言い方。||主語は目上の人

・「お——になる」「ご——になる」という形を使う。

例 お話しになる ご使用になる

・「れる」「られる」を使う。

例 行かれる 述べられる

・特別な言葉を使う。

例 おつしやる ごらんになる
めしあがる いらっしやる

② 謙譲語(けんじょうご)：話し相手や、話題になつてゐる人に敬意を表すため、動きのおよぶ相手を高めたり、自分や身内に関わることをへりくだらせたりして言う言い方。||主語は自分、または身内

・「お——する」「ご——する」という形を使う。

例 お答えする ご用意する

・特別な言葉を使う。

例 参る うかがう 拝見する
申しあげる

〈特別な言葉〉

見る	行く いう 使う する	尊敬語
ごらんになる	いらっしやる めしあがる なさる	まいる・参上する 申す・申しあげる
拝見する	いたす いたぐ	はい いただく



(3)

丁寧語：話し相手に敬意を表すため、丁寧に言う言い方。

・特別な言葉を使う。

例 ございます よろしい

・文末に「です」「ます」をつける。

例 本です。歩きます。

一

次の文の——線の敬語の種類をあととのア～ウから選び、記号で答えましょう。

① 先生が手紙をごらんになる。

② わたしは図書館にいます。

③ 先生に母の話を申しあげる。

ア 尊敬語

イ 謙譲語

ウ 丁寧語

二

次の——線の言葉は、ア 尊敬語、イ 謙譲語、ウ 丁寧語、のどれに当たりますか。記号で答えましょう。

① 父も参加したいと申してあります。

② あなたはごらんになりましたか。

③ ここにはたくさんのお本があります。

④ おかげになつてお待ちください。

⑤ お部屋のおそじは、わたくしがいたしました。

三

次の文の——線の敬語の種類をあとからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① どこか まちがつて いると思 います。

② 明日は十時までにおこしください。

③ 手品をひとつお目にかけましょう。

ア 尊敬語
イ 謙譲語
ウ 丁寧語

四

次の文の——線の言葉を「お(う)こになる」という言い方を使って、尊敬語に直しなさい。

① 山に登る。

② 家に帰った。

③ よく利用した。

五

次の文の——線の言葉を「おうする」という言い方を使って、謙譲語に直しなさい。

① 注文を聞く。

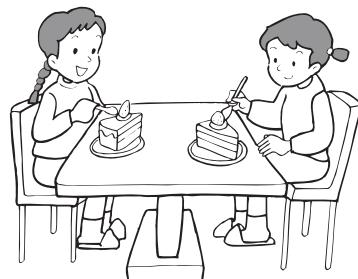
② かきを貸した。

③ 部屋をさがす。

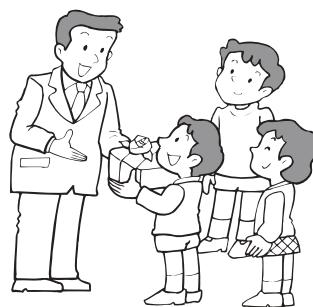
六

次の——線の言葉を、A・Bの場面に合った敬語に直して書きましょう。

A



B



Aの場面

(1)

食べる

①

お客様が、ケーキを

②

わたしも、ケーキを

。 。

Bの場面

(2)

わたす

・わたしたちは、先生に記念品を

。 。

七

次の文の——線の言葉と同じ種類の敬語が使われている文をあととのア～ウから選び、記号で答えましょう。

①

お帰りになるときは、わすれ物にご注意ください。

ア あなたのお父様がお話しになりました。

イ わたしがみなさんにお話ししましょう。

ウ ぼくにはとてもお話しできません。

② 先生がみなさんに話されると思います。

ア かぜをひいたので、妹は会場に来られない

と思います。

イ ぼくは時間どおりに会場に来られると思いま

ます。

ウ 明日、先輩がたが会場に来られると思いま

□ □

八 次の文の——線の言葉を丁寧語に書き直します。

しょう。

- ① 発表するときは、大きな声ではつきり言う。

② これは、初めて聞いた話だ。

③ すばらしいえんそうに、心から感動した。



九 次のア～ウの文から、敬語が正しく使われてい

るものを一つ選び、記号で答えましょう。

ア おじさんがぼくにおたずねする。

イ 妹が、ぼくにおたずねになる。

ウ 近いうちにぼくの方からおたずねします。



第十一講・確認テスト

次の中から尊敬語を選びなさい。

- | | |
|------------------|--------------|
| 1
ア
お話しする | イ
お読みになる |
| ウ
いただく | 工
まいる |
| 2
ア
ごらんになる | イ
拝見する |
| ウ
見ます | 工
見る |
| 3
ア
お読みする | イ
おうかがいする |
| ウ
さしあげる | 工
来られる |
| 4
ア
さしあげる | イ
お持ちする |
| ウ
おっしゃる | 工
申す |
| 5
ア
お伝えする | イ
お話しになる |
| ウ
お聞きする | |
| 工
お守りする | |

第十一講・注文の多い料理店①（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

二人のわかいしんしが、すつかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぱうをかついで、白くまのようないぬき連れて、だいぶ山おくの、木の葉のかさかさしたとこを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「ぜんたい、^①ここらの山はけしからんね。鳥もけものも一ぴきもいやがらん。何でもかまわぬいから、早く^②タンタアーノと、やつてみたいもんだなあ。」

「しかの黄色な横つぱらなんぞに、二、三発お見まい申したら、ずいぶ



ん痛快^{つうか}だろうねえ。くるくる回つて、それからどたつとたおれるだろうねえ。」

それは^④だいぶの山おくでした。案内してきた専門^{もん}の鉄ぱううちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらいの山おくでした。

それに、あんまり山がものすごいので、その白く

まのようないぬきが、二ひきいつしょに目まいを起こして、しばらくうなつて、それからあわをはいて死んでしまいました。

「^⑤実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよつと返してみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、も一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

〈宮沢賢治「注文の多い料理店」より〉

(1) 線①「ここらの山はけしからんね」とあります。なぜそう思ったのですか。

(2) 線②「タンターン」とは、何の音を表した言葉ですか。

(3) 線③「くるくる回って、……たおれるだろうねえ」の会話は、どんな感じで話しているように読み取れますか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 動物の動きのはげしさにあきれている。
 イ 動物を鉄ばうでたおすことを楽しみにしている。
 ウ 動物をうつことの重大さを思つてきん張している。

(4) 線④「だいぶの」を別の表現でくり返している部分を文章中からぬき出し、初めと終わりの五字を答えましょう。

 う

(5) 線⑤「実にぼくは、二千四百円の損害だから分かることとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 犬の命よりも、お金のほうを大切に思つていること。

イ もうけよつと思って犬にお金を使つていること。

ウ 金持ちであることをじまんしていること。

(6) 二人の「しんし」について述べたものとしてふさわしいものを次の中から全て選び、記号で答えましょう。

- ア りょうし。 イ 遊びでかりに来ている。
 ウ 動物の命をそまつにあつかつて平氣でいる。
 エ 鉄ばうのうち方がうまい。

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

そしてガラスの開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

【どなたもどうかお入りください。決してごえんりょはありません。】

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

「こいつはどうだ。やっぱり世の中はうまくできてるねえ。今日一日なんぎしたけれど、今度はこんないいこともある。このうちは料理店だけれども、ただでごちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してごえんりょはありません」というのはその意味だ。」

二人は戸をおいて、中へ入りました。そこはすぐ下になっていました。そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】

二人は大かんげいというので、もう大喜びです。
「君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。」「ぼくらは両方かねてるから。」

□ろう下を進んでいきますと、今度は水色の

ペンキぬりの戸がありました。

「どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

【これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうさ。】

そして二人はその戸を開けようとしますと、上に黄色な字でこう書いてありました。

【当軒は^(とうけん)注文の多い料理店^(じゆもん)ですから、どうかそこはご承知ください。】

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

（宮沢賢治「注文の多い料理店」より）

(1) 線①「決してごえんりょはありません」という言葉を、二人のしんしはどのように理解したのですか。文章中から九字でぬき出しましょう。

(2) 線②「ぼくらは両方かねてるから」とは、何と何をかねているという意味ですか。

(3) □にもつともよくあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えましょう。

- ア ザンザン イ シンシン
ウ ズンズン エ バラバラ

(4) 線③の言葉には、このしんしのどんな性格が表れてますか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 料理店の主人をかばおうとするやさしい性格。
イ 外国にあこがれる夢見がちな性格。
ウ 知ったかぶりをするみえっぱりな性格。
エ 他人の意見に反対するひねくれた性格。

(5) 線④「注文の多い料理店」という意味を、二人のしんしはどのように理解したのですか。文章中から九字でぬき出しましょう。

第十一講・確認テスト

次の中から謙譲語を選びなさい。

- | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-------------------------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1
ア
ウ
イ
エ | 2
ア
ウ
イ
エ | 3
ア
ウ
イ
エ | 4
ア
ウ
イ
エ | 5
ア
ウ
イ
エ |
| ごらんになる | お食べになる | めしあがる
<small>はいけん</small>
見する | お教えする | お出かけになる |
| 話される | お持ちになる | おつしやる | お話しになる | さしあげる |
| お聞きする | お休みになる | ご案内する | ごぞいます | 持たれる |

第十三講・注文の多い料理店②（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

【どうかぼうしと外どうどくつをおとりください】

「どうだ、取るか。」「しかたない、取ろう。確かによっぽどえらい人なんだ。おくに来ているのは。」

二人はぼうしとオーバコートをくぎにかけ、くつをぬいでペタペタ歩いて戸の中に入りました。

戸のうら側には、

【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがつたものは、みんなここに置いてください。】

と書いてありました。戸のすぐ横には、黒ぬりのりつばな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。

【つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。】

かぎまでそえてあつたのです。

「ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。金氣のものはあぶない。ことにとがつたものはあぶないと、こういうんだろう。」

「そうだろう。してみると、かんじょうは帰りにここではらうのだろうか。」

「どうもそうちらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人は眼鏡を外したり、カフスボタンを取ったり、みんな金庫の中に入れて、パチンとじょうをかけました。

少し行きますとまた戸があつて、その前にガラス

のつぼが一つありました。戸にはこう書いてありました。

見ると確かにつばの中のものは牛乳のクリームで30
だ。さういふことを聞いたとき、主人はさういふことを思ひました。

A 「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

B 「これはね、外が非常に寒いだろう。部屋の中があんまりあたたかいとひびが切れるから、その予防なんだ。どうもおくには、よほどえらい人が来ていて、こんなところで、案外ぼくらは、貴族と近づきになるかもしれないよ。」

二人はつばのクリームを顔にぬつて手にぬつて、それからくつ下をぬいで足にぬりました。それでもまだ残つていましたから、それは二人ともめいめいこつそり顔へぬるふりをしながら食べました。
それから大急ぎで戸を開けますと、そのうら側には、

【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。】

と書いてあって、小さなクリームのつばがここにも置いてありました。

C 「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかつた。あぶな

45

40

35

30

D 「ああ、細かいとここまでよく気がつくよ。ところで、ぼくは早く何か食べたいんだが、どうも、こう、どこまでもろう下じやしかたないね。」

すると、すぐその前に次の戸がありました。

【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。】

そして戸の前には、金ぴかのこう水のびんが置いてありました。

二人はそのこう水を、頭へパチャパチャふりかけました。

ところが、そのこう水は、どうもすのようにおいがするのでした。

E 「このこう水は変にすくさい。どうしたんだろう。」

F 「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちが

45

40

35

30

50

えて入れたんだ。」

二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

70

【いろいろ⁽³⁾注文】が多くてうるさかつたでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうか、体中に、つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。】

なるほどりつぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてあります。が、今度という今度は、二人ともぎよつとして、おたがいにクリームをたくさんぬつた顔を見合わせました。

（宮沢賢治「注文の多い料理店」より）

75

(1)

——線①・②の注文を読んで、二人はなぜそうしなければならないと考えましたか。それぞれあるのアホから、ふさわしくないものを選び、記号で答えましょう。ただし、一つとは限りません。

①

【どうかぼうしと外どうとくつをおとりください。】

ア 食事をするのに、ぼうしと外どうとくつは不要ないから。

イ 料理店の主人が、ぼうしも外どうもくつもきらいだから。

ウ えらい人が来ているのに、ぼうしや外どうやくつを身につけているのは失礼だから。

エ ぼうしと外どうとくつをとると、料理がおいしく感じられるから。



(2)

【ネクタイピン、……みんなここに置いてください。】

ア 食事をするのに、金物類は必要ないから。
イ 料理に電気を使うので、金物類はあぶない
から。

ウ 帰りにここでお金をはらうので、さいふも

置いていけばよいから。

エ えらい人が来ているので、とがつたものを
持つているとあやしまれるから。



(3)

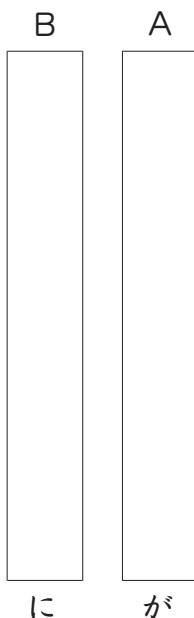
——線③「注文」は、だれがだれにしているの
ですか。Aは自分で考え、Bは本文からぬき出し
て答えましょう。

A～Fの言葉からは、二人のどんな気持ちが分
かりますか。次の中からもつともふさわしいもの
をそれぞれ選び、記号で答えましょう。ただし、
同じ記号を二度以上使つてもかまいません。

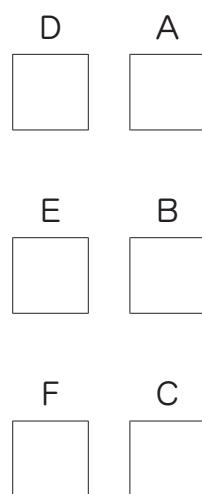
ア あれ？ 何かおかしい。

イ 細やかな心配りがありがたい。

ウ いつたいいつ料理が食べられるのだろう。



注文している。



エ 何もおかしくはない。えらい人に会えるか
かもしれないぞ。

オ きっと何かのまちがいだ。気にすることは
ない。

カ 気味が悪いからもう帰りたい。
キ 何だか楽しそうなことだなあ。

(4)

——線④「おたがいにクリームをたくさんねつた顔を見合させました」とありますか、なぜですか。次の□(あ)(う)にあてはまる言葉をあとの中からそれぞれ選び、記号で答えましょう。

戸に書かれた文を読んで、今度という今度は二人とも□(あ)とした。今まで、料理を□(い)ためにいろいろ準備させられていると思っていたけれど、もしかすると自分たちが□(う)ためだつたのかもしれない、やつと気づいたからだ。

ア ほつ
ウ 食べられる

イ ぎよつ
エ 食べる

(あ)

(い)

(う)

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」⁽⁴⁾

「あたりまえさ。親分の書きようがまざいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかつたでしよう、お気の毒でしたなんて、まぬけたこと⁽⁶⁾を書いたもんだ。」⁽⁵⁾

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、ほねも分けてくれやしないんだ。」⁽⁷⁾

「それはそうだ。けれども、もしここへあいつらが入ってこなかつたら、それはぼくらの責任だぜ。」⁽⁸⁾

「よぼうか、よぼう。おい、お客さんがた、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿もあらつてありますし、菜つ葉ももうよく塩でもんでおきました。あとは、あなたがたと、菜つ葉をうまく取り合わせて、真つ白なお皿にのせるだけです。早くいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラドはおきらいですか。そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょか。とにかく早

50

45

40

くいらつしやい。」

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中では、フツフツと笑つて、またさけんでいます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては、せつかくのクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じき持つてまいります。さあ、早くいらつしやい。」⁽⁹⁾

（宮澤賢治「注文の多い料理店」より）



55

(1) 線① 「これは、その、……ぼくらが……」

と言葉がつまっているのはなぜですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 自分たちが大変な立場にあることに気づき、とてもおそろしくなったから。

イ いつたいどんなものを食べさせられるか分からないと、とても不安になつたから。

ウ 相手が近づいてくるのが分かり、だんだんといかりがこみ上げてきたから。



(2) 線② 「おなか」には二つの意味がふくまれています。それぞれ「なか」の意味がよく分かるように答えましょう。



(3) □にもつともよくあてはまる言葉を次のなかから選び、記号で答えましょう。

ア うろうろ ウ ひょろひょろ イ きょろきょろ エ ちょろちょろ



線③ 「がたがたがたがた」の表現について述べたものとしてもつともふさわしいものを次の

中から選び、記号で答えましょう。

ア ふるえるときの音が大きいことを表している。

イ 泣きながらふるえている様子がよく分かる。

ウ とてもはげしくふるえている様子がよく分かる。



(5)

——線④「もう気がついたよ」とあります
が、どんなことに気がついたと言っているの
ですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号
で答えましょう。

ア そろそろ料理を食べさせてもらえると
いうこと。

イ すぐ近くに「親分」がいるということ。

ウ 自分たちが食べられてしまうこと。

(6)

——線⑤「親分」、⑦「ぼくら」とあります
が、「ぼくら」は、「親分」に対し、何に当たるの
ですか。漢字二字で答えましょう。

(8)

二人のしんしの絶望的な様子を、たとえを使つ
て表現しているところがあります。その部分をぬ
き出しましょう。

(9) ——線⑧・⑨は、それぞれだれに對して言つた
言葉ですか。

(7) ——線⑥「まぬけたこと」とあります
が、「ぼくら」もまぬけたことを言つて
いるところがあります。その文を二つぬき出しま
しょう。

(8)



(9)



第十三講・確認テスト

かくにん

次の中から類義語を選びなさい。

1 興味

ア 寒心
ウ 感心

イ 関心
エ 希望

2 準備

ア 用意
ウ 備品

イ 標準
エ 心配

3 向上
ア 上部
ウ 進歩

イ 進行
エ 上段
ウ じょうだん

4 不安

ア 安心
ウ 安全

イ 心配
エ 不信

5 期待

ア 期日
ウ 大切

イ 活気
エ 希望

第十四講・「じばの教養



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

さい。

* いっぱいやりながら、列車時刻表を熟読するという風流人の隨筆を読んだこともある。つい読みふけて時のたつのを忘れる、という。人間、さまざまな趣味がある。

そういう話に比べると、辞書を読むのは、はるかに正統的で、むしろ常識的すぎて気がひけるくらいだ。そもそも字引きなどと言つて、引くものと決めてしまつているのがおかしい。

辞書は引くものと割り切つている実用派はしらなり語ばかりを相手にする。それでは親しみもわかな道理だ。どんな辞書にも日常よく使われることばかり入つていて、こまかい説明がついているけれども、実用派はそんなところを見ることがない。せっかくの宝が眠つたままである。もったいない。

辞書のおもしろさは、わかり切つてていると思つていることばの項をていねいに読むことにある。そこをのみこまないと辞書とは仲良しになれない。

辞書を道具と考え、必要なときにだけちょっと使い、あとは放つたらかしにして置くのは心なき人

のことである。そういう辞書が本当に役立つと考えるのはすこし虫がよすぎる。人間だって頼みごとのあるときだけやつてくるような*手合てあいを友だちとは

言うまい。ふだん用はないが、どうしているか、とたずねてくれるようであつてこそ、付き合いがあると言える。

15

20

10

(1) 線① 「おかしい」とあります。どうなところが「おかしい」ですか。それを説明し、た次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

のことを

と呼んで、

引くものと決めてしまっているところ。

(2)

——線② 「心なき人」とは、ここではどのような人ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辞書を読むような常識的な人。

イ お酒をのみながら、時刻表を読む人。

ウ 辞書を必要なときにしか引かない人。

工 辞書を放つたらかしてまったく使わない人。

(3)

この文章で筆者が最も述べたかったことは、何ですか。文章中から二文でぬき出し、初めと終わりの四字を答えなさい。(、や。も一字と数えます。)

初め	終わり

【一題目】次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

* いっぱいやりながら、列車時刻表を熟読するとい
う風流人の隨筆を読んだこともある。つい読みふ
けつて時のたつのを忘れる、という。人間、さまざま
な趣味がある。

そういう話に比べると、辞書を読むのは、はるか
に正統的で、むしろ常識的すぎて気がひけるくらい
だ。そもそも字引きなどと言つて、引くものと決め
てしまつているのがおかしい。

辞書を道具と考え、必要なときにだけちょっと使
い、あとは放つたらかしにして置くのは心なき人の
ことである。そういう辞書が本当に役立つと考える
のはすこし虫がよすぎる。人間だつて①たの
あるときだけやつてくるような*手合を友だちは
言つまい。ふだん用はないが、どうしているか、ど
たずねてくれるようであつてこそ、付き合いがある
と言える。

辞書は引くものと割り切つている実用派はしらな
い語ばかりを相手にする。それでは親しみもわかな
い道理だ。どんな辞書にも日常よく使われることば
が入つていて、こまかい説明がついているけれども、
実用派はそんなところを見ることがない。せつかく
の宝が眠つたままである。もつたいたない。

辞書のおもしろさは、わかり切つてていると思つて
いることばの項をていねいに読むことにある。そこ
をのみこまないと辞書とは仲良しになれない。

〈外山 滋比古「ことばの教養」より〉

* いっぱいやる=お酒を飲むこと。

* 手合=連中。

(1) — 線①「頼みごとのあるときだけやつてくる」

とあります。これは辞書のどのようないい方を

たとえたものです。それを説明した次の文の

□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

い。

辞書を □ と考えて、必要なときだけ

使い、それ以外は □ にして置くような使い方。

(2) — 線②「宝」とありますが、これを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

辞書の中の、こまかい □ がついている

こと。

(3) この文章で述べられている内容としてふさわしいものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辞書を読むより、列車時刻表を読むほうが常識的だ。

イ 辞書を放つたらかしておくのは心ない人のすることだ。

ウ 辞書のおもしろさは、しらない語をよく読むことだ。

エ 実用派は、辞書でよく使われることばばかり引く。



第十四講・確認テスト

かくにん

次の中から対義語を選びなさい。

1 絶対

ア 反対
ウ 部分

イ 相対
エ 対応

2 減少

ア 加点
ウ 増加

イ 過大
エ 過分

3 理想
ウ 現実
ア 状態

イ 想像
エ 事件

4 解散

ア 群衆ぐんしゅう
ウ 集合

イ 文集
エ 集団

5 安心

ア 心労
ウ 放心

イ 安全
エ 心配

第十五講・熟語の構成、同音異義語、同訓異字



熟語の構成

◆熟語とは◆

熟語とは、二字以上の漢字を組み合わせてできた言葉のこと。多くの熟語は漢字二字で書き表される。

◆二字熟語の構成◆

①にた意味を表す漢字を組み合わせたもの

例 集合 道路 停止 出発

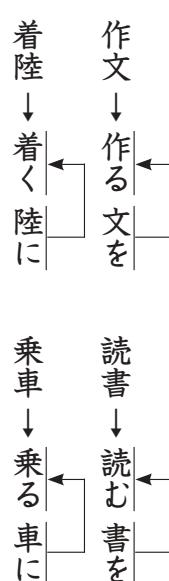
②意味が対になる漢字を組み合わせたもの

例 上下 明暗 進退 親子

③上の漢字が下の漢字の意味を打ち消しているもの

例 不正 無休 未完 非礼

⑤上の漢字が下の漢字の意味を打ち消しているもの



④上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表すもの

例 作文 → 作る文を

読書 → 読む書を

も

着陸 → 着く陸に

乗車 → 乗る車に



熟語の意味が分からなくても、漢字一字一字の意味と熟語の構成を考えれば、大体の意味を推測^{すいそく}できることがある。

再会 → 再び会う 代打 → 代わりに打つ

一 次の①～④の構成の熟語をあととのア～クから二つずつ選び、記号で答えましょう。

① 上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明しているもの。

② 上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表すもの。

③ 意味が対になる漢字を組み合わせたもの。

④ にた意味を表す漢字を組み合わせたもの。

(3)	(1)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>

(4)	(2)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>

ア 戦争 イ 勝負 ウ 消火 エ 工業 天地
オ 美人 カ 加熱 キ 学習 ク 黒板

二 次の①～⑤の熟語と同じ構成の熟語をあととのア～クから二つずつ選び、記号で答えましょう。

① 登山 ② 外国 ③ 表現 ④ 高低
⑤ 未定

ケ オ ア 青空
良心 増減 行進 岩石
力 不安 キ 昼夜 乗船
コ 行進 ウ 乗船 無理

(5)	(3)	(1)
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

(4)	(2)
<input type="text"/>	<input type="text"/>
・	・
<input type="text"/>	<input type="text"/>

イ 夜行 乗船 無理
ク 昼夜 着席

三

A・Bの中から漢字を一字ずつ選び、次

の構成になる漢字二字の熟語を三つずつ作りましょう。ただし、同じ漢字は二度使えません。

① にた意味を表す漢字を組み合わせた熟語。

.
.

② 意味が対になる漢字を組み合わせた熟語。

.
.

③ 上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明している熟語。

.
.

④ 上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表す熟語。

.
.

B A

新	登	夫	用	旧	計	乗
妻	勝	墓	繪	場	大	西
火	富	類	画	退	短	消
敗	類	画	退	短	測	
山	画	退	短	測		
洋	退	短				
石	短					
群	測					

同音異義語

漢字には、同じ読み方をするものがたくさんあるが、そのうち、音読みがまったく同じで、意味がちがう熟語のことを、同音異義語という。

例 カイホウ

人質を

する。

校庭を

する。

病気が

に向かう。

会員に

が配られる。

例 コウエン

のベンチにすわっている。

公民館で芝居の

が行われた。

ノーベル賞科学者の

を聞く。

同訓異字

同じ読み方をする漢字のうち、訓読みが、まったく同じで、意味がちがう字のことを同訓異字という。

例 とる

虫を

る。

手を

る。

例 きく

音を

く。

薬が

く。

例 とまる

まる車が目に

まる。

※同訓異字を使って一つの文章にすると、覚えやすくなる。

四 次の——線のカタカナを漢字に直したものとして正しいほうを選び、記号に○をつけなさい。

(5)

④ キヨウリヨクな手助けが必要だ。
⑤ 会社で健康ホケンに入る。

イ ア
保 険

イ ア
強 力

③ いろんなことにカンシンを持つ。④ ゲンシ時代の化石が見つかった。

イ ア
協 力

イ ア
感 心

② ゲンシ時代の化石が見つかった。
③ いろんなことにカンシンを持つ。

イ ア
原 子

イ ア
原 子

① 街でアンケートにカイトウする。
② ゲンシ時代の化石が見つかった。

イ ア
回 答

イ ア
解 答

五 次の——線のカタカナを漢字に直したものとして正しいほうを選び、記号に○をつけなさい。

(5)

④ わからなかつた問い合わせをウツス。
⑤ 生徒の安全管理に日々ツトメル。

イ ア
努 める

イ ア
務 める

② 説明するのにやさしい例をアゲル。
③ あの男がすがたをアラワス時間だ。

イ ア
現 す

イ ア
表 す

① 待ち合わせをして友達とアウ。
② 説明するのにやさしい例をアゲル。

イ ア
会 う

イ ア
舉 げる

イ ア
上 げる

六

次の――線のカタカナを漢字に直したものとし
て正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1) カイジョウの近くでチケットを買う。
 (2) イベントのカイジョウは午前十時だ。
 (3) よく晴れてカイジョウはおだやかだ。

ア 海上

イ 階上

ウ 会場

エ 開場

①
 ②
 ③

- (1) この鳥はセイチョウすると美しい声で鳴く。
 (2) セイチョウのオスの羽の色は大変美しい。
 (3) 毎朝新聞を読むのがシユウカンになる。
 この機関紙はシユウカンで発行される。

ア 習慣 イ 週間 ウ 週刊 エ 終刊

①

①
 ②

ア 成長

イ 生長

ウ 声調

エ 成鳥

七

次の――線のカタカナを漢字で書きなさい。
 新学期から学級イインに選ばれた。
 駅前に新しく歯科イインが開業する。

- (1) 駅前に新しく歯科イインが開業する。
 (2) 新学期から学級イインに選ばれた。

①
 ②

①
 ②

- (1) 小学生をタイショウとしたイベント。
 (2) 二人はタイショウ的な性格せいかくだ。

①
 ②

八

次の――線のカタカナを、それぞれ漢字一字で書きなさい。

(1) 学校に毎日わすれモノをして来るモノがいる。

① ②

(2) 夏のアツい日に、アツ着をしてアツいお茶を飲む。

① ② ③

(3) ハヤく走つたら、ハヤく目的地にツくこと気にがついた。

① ② ③ ④

第十五講・確認テスト

かくにん

次のカタカナを漢字に直したものとして、正しいものを選びなさい。

- 4 平和維持活動にカンシンを持つ。
 ア 関心 イ 感心
 ウ 寒心 エ 歓心

— その時感じたシンジョウを言葉にするのは難し

5 新聞キシヤになりたい。

- ア 汽車 イ 貴社
 ウ 帰社 エ 記者

- ア 信条 イ 身上
 ウ 身上 エ 心情

2 このキカン、この道は通行止めだ。

- ア 期間 イ 機関
 ウ 基幹 エ 器官

3 責任をツイキユウする。

- ア 追求 イ 追及
 ウ 追究 エ 追給

第十六講・ベートーベン（伝記）

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

ルードヴィヒは作曲がうまくいかず、父に相談した。

「いいか。あしたから、一步も外に出るんじゃない。
朝からずっとピアノの前にこしかけて、指から血が出るまで、ひきつづけるんだ。」

ヨハンはいった。

父はすぐれた歌手だけれど、作曲のことに関しては、^①父のいっていることはちがうんじゃないけど、ルードヴィヒは思った。

でも、すっかり自信をなくしてしまっていたルードヴィヒは、どうにでもなれと思った。それで、つぎの日は、朝からピアノの前にこしかけて、自分の曲だけをひきつづけた。

速度記号も発想記号も、わざと無視してひいてみた。^②*和音も、わざとぞくらしてみた。
「……おもしろいよ。こっちのほうが。」
ルードヴィヒは新しい五線紙をもつてきて、さつそく、いまひいてみた曲を書きうつした。
何回もそうやってひき変え、書きなおしては、ネーフエ先生のところへもつていく。またしかられ、またなおす。いく日もいく日もそうやつたあと、とうとうある日、ネーフエ先生がいった。
「ルードヴィヒ、おめでとう。これならりっぱだよ。すてきな曲ができたね。」



そのときルードヴィヒ＝バン＝ベートーベン、十二^③さい。そのはじめての曲が、『ドレスラーの行進曲の主題による九つの変奏曲ハ短調』である。

*和音＝二つ以上の高さのちがう音が同時にひびいたときの音。

〈畠山 博「ベートーベン」より〉

30

(1) — 線①「父のいっていること」とは、どのようなことですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 苦しい思いを曲にするのが一番いいということ。
イ 作曲中はずつとピアノをひいているべきだ
いうこと。

- ウ 作曲中は父以外の人間と会ってはいけないと
いうこと。
エ 作曲中は眠らずに、五線紙に曲を書きうつす
べきだということ。



(2) — 線②「ひきつづけているうちに、なんだかだんだんといくつになってきた」とあります。なぜルードヴィヒはといくつになってきたのですか。文中の言葉を使って答えなさい。

(3)

ド・ウイヒがはじめて作曲した曲についての説明としてふさわしくないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ネーフエ先生の指導を受けて曲を完成させた。

イ 作曲をするときには、それまでに作曲した曲の速度記号や発想記号を無視したり、和音をずらしたりしてみた。

ウ ルードウイヒが十二さいのときに完成した。

エ 作曲を始めてからほとんどすぐにできあがつた。



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

さに五線紙に書いておく。

そういうものが、前後の関係なしにたくさんあって、それを、あとで構成するのだ。

この時期、ベートーベンは、もう一つの大きなピ

ンチにみまわれている。なぜだか理由はわからない

のだけれど、ピアノや弦楽器の低い音を聞くとき、

それが、^①まえのようにいい*ハーモニーになつて

聞こえないのだ。

5

そういうと、たつたいま頭のなかで聞こえていた音と、^③じつさいの音がちがうのだ。
「そんなばかな……。」

（畠山 博「ベートーベン」より）

*ハーモニー=音のひびき合い。調和。

*和音=二つ以上の高さのちがう音が同時にひびいたときの音。

和音が、高いほうだけ耳に入つて、低いほうがよく聞こえない。これは作曲家にとって、重大なことだつた。

はじめ第一交響曲の作曲をしていて、そのことに気がついた。

^②ベートーベンの作曲のやり方というのは、頭にう

かんだ*主題をつぎつぎに頭のなかで発展させていつきに書くというのとはちがつていた。

散歩のとちゅうや家にいるとき、とつぜん天のどこからかとびこんでくるようにして頭をしめつける*樂想がある。するとそれを、ベートーベンは、とつ

10

*主題=中心となる樂想やメロディ。

*樂想=樂曲の構想。頭のなかにえがく樂曲のイメージ。

15

(1)

——線① 「まえのようないいハーモニーになつて聞こえない」について、次の問いに答えなさい。

あ ——線①のことについてべーとーべんが気づいたのは、いつですか。「……をしていたとき。」に続

くように、□にあてはまる言葉を文中からぬき出しなさい。



をし

(i)

——線①と同様のことが書かれている一文を文中からさがし、初めの五字を答えなさい。



(2)

——線②「べーとーべんの作曲のやり方」とは、どんなやり方ですか。ふさわしいものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭にとびこんできた楽想をすぐに五線紙に書きとめておき、あとで集まつたものを構成するやり方。

イ 思いついた樂想をとつさに五線紙に書きとめ、思いついた順にならべていくやり方。

ウ 思いついた主題をつぎつぎに頭のなかでひろげていき、集中していくきに書くやり方。

エ 最初に曲の構成を考えておいて、それに合う主題をいくきに考えていくやり方。

(3) ——線③「じつさいの音」とは、何の音ですか。文中の言葉を使って答えなさい。



第十六講・確認テスト

かくにん

次のカタカナを漢字に直したものとして、正しいものを選びなさい。

1 道でばつたり友人にアつた。

ア 在 イ 合
ウ 会 エ 有

2 夏休みのカダイが終わらない。

ア 過大 イ 課題
ウ 仮題 エ 花台

3 薬がきく。

ア 聞 イ 聴
ウ 効 エ 利

4 まどを開ける。

ア 空 イ 開
ウ 明 エ 飽

5 席につく。

ア 付 イ 突
ウ 着 エ 就

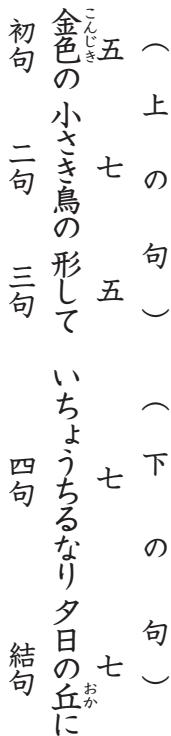
第十七講・短歌①（百人一首）

短歌

短歌とは、日本の定型詩である和歌の形式の一つ。和歌には長歌、片歌^{へんか}、旋頭歌^{せんとうか}など色々な種類があるが、短歌だけがうたいつけられたため、今では和歌といえば短歌を指すようになった。

◆短歌の形式◆

「五・七・五・七・七」の三十一音からなっている。初めの「五・七・五」を上の句、後の「七・七」を下の句という。



- 字余り ^{あま} 音数が三十一音より多いこと。
- 字足らず ^{あま} 音数が三十一音より少ないこと。

◆表現技法◆

- 倒置法 ^{とう} 言葉の順序を逆^{さかへ}にすること。
- 比喻 ^{ひゆ} ほかのものにたとえて意味をわかりやすくすること。
- 体言止め 名詞（ものの名前）で語句をとめること。
- 擬人法 人でないものを人にたとえること。



— 次の短歌を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

|| 近代短歌 ||

A 石走る垂水の上のさわらびの

|| 和歌（万葉集）||

岩の上を水が激しく流れ落ちる滝のほとり
に、わらびが芽を出す
がやつてきたの
だなあ。

もえ出づる
になりにけるかも

志貴皇子

C 金色の小さき鳥の形して
いちょうちるなり夕日の丘に

与謝野晶子

みかんの香せり冬がまた来る
木下利玄

D 街をゆき子どものそばを通るとき

B 東の野にかぎろひの立つ見えて

柿本人麻呂

かへり見すれば月かたぶきぬ

東の方の野には夜明けの光がさし始めるのが
見え、西の方をふり返ると月がかたむき、しづ
もうとしている。

(1) Aの歌の□にあてはまる季節を答えなさい。

にえがかれている。

イ たくさんの鳥たちのにぎやかなまいが、
かえつて夕暮れのさびしさを感じさせる。
ウ 夕日に照り映えてまい落ちる銀杏の葉の
形と色を鳥にたとえて、秋の夕方のはなや
かな美しさをえがいている。

(2) Bの歌の「かぎろひ」とは何ですか。()
の中から最もふさわしい言葉をぬき出しなさい。

(3) Cの歌について、次の問いに答えなさい。

① この歌によまれている季節はいつですか。

② この歌の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア みかんを売っていた
イ みかんのかおりがした
ウ みかんのかおりがしなかつた
エ みかんを手わたした

(4)

Dの歌の「みかんの香せり」というのは、今
の話し言葉では使われない言い方(文語)です。
その意味として最もふさわしいものを次のなか
ら選び、記号で答えなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えましょう。

短歌は、五・七・五・七・七の三十一音で作られます。千三百年以上も昔から作られ、今も多くの人々に親しまれています。自然の風景や気持ちが、それぞれの時代の言葉でうたいあげられてきました。

まず現代の歌人の作品を読みましょう。

A 四万十に光の粒しまんとをまきながら

川面かわもをなでる風の手のひら

俵たわら 万智まち

四万十川の水面に日ざしがふり注ぎ、おだやかな川風が日ざしこたわむれるように川面にさざ波を立っています。「光の粒」「なでる」「手のひら」という言葉が、やわらかな音のひびきとリズムを作り出しています。

10

5

昔の人は、どのような情景をよんだのでしょうか。
奈良時代の終わり（千二百年ほど前）には、『万葉集』という歌集が作られました。その中の一つに、次のような歌があります。

B 石走いはばしる垂水たるみの上のさわらびの
萌もえ出いだづる春になりにけるかも

志貴皇子

わらびの新芽が、溪流けいりゅうのほとりで、たきのしぶきに当たつてかがやいています。春をむかえた喜びが、かるやかな水音と光の中で、生き生きとうたわれています。

〈教科書書きおろしによる〉

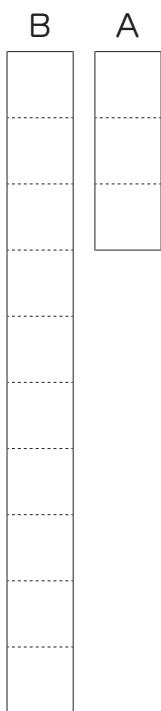
(1) Aの短歌に使われている表現方法を次の中から全て選び、記号で答えましょう。

ア くり返し

イ 体言止め

ウ 倒置法

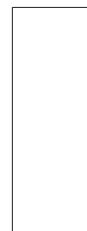
エ 擬人法



(2)

——線①「光の粒」とは、どのような様子を表していますか。その様子を説明した次の文の A・Bにあてはまる言葉を、Aは文章中から三字でぬき出し、Bは十字以内で考えて答えましょう。

日ざしがふり注ぐ川面に A が立ち、 B いる様子。



(3)

——線②「おだやかな川風」とあります。川風がおだやかであることを表している言葉を、Aの短歌の中から三字でぬき出しましょう。



(4)

——線③「春をむかえた喜び」とあります。作者は何を見て春を感じているのですか。Bの短歌の中からぬき出しましょう。



(5)

A～Bの短歌には共通して感じられる音があります。それは何の音ですか。漢字一字で答えましょう。

〔三〕 次の短歌と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

海恋し 潮の遠鳴り かぞへては

少女となりし

父母の家

与謝野 晶子

【鑑賞文】

ふるさとをはなれ、都會ぐらしをするようになつてから、ひさしいのです。ふるさとの海を、こいしくおもわずにはいられません。

わたしの家は、浜はまべにほど近いところにあります。風が潮のかおりをはこんてきて、浜にうちよせる波の音がいつもきこえていました。

A、ゆめみるような少女のころをすごしたのでした。海のようにふかい父と母の愛をうけて、育つたふるさとなのです。

——生まれ育つたふるさとには、人それぞれになつかしい思い出があります。作者にとつては、こ

15

10

5

とに潮鳴りの音が、子守りうたのように、そしてまた少女をつつみこむやさしい音楽のように、こころにひびいたのでしょうか。都會にいても、その音がきこえてきたことでしょう。

はじめに「海恋し」といきつて、ふかいおもいをあらわしました。

〔桜井信夫「はじめてであう短歌の本【心の歌Ⅱ】」より〕

20

(1)

——線「海恋し」とありますが、短歌の作者は、なぜこのように感じたのですか。鑑賞文の中の言葉を使って答えなさい。

(2)

鑑賞文の **A** に入る表現としてふさわしいものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのよせる波を見つめながら
 イ そのよせる波をかぞえながら
 ウ その潮鳴りの音をききながら
 エ その潮鳴りの音をおもいうかべながら



(3)

この短歌の説明としてふさわしいものを次のなかから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 都会ぐらしを感じさせる言葉を用いて、ふるさとの生活と対比させてている。

イ 子守りうたを「潮の遠鳴り」にたとえて表現している。

ウ 潮のかおりを表した言葉がたくさん使われている。
 エ 短歌の最初に言い切りの表現を使つて、ふるさとへの深い思いを表している。



四 次の短歌と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

ガレージへ トラックひとつ 入らむとす

少しためらひ 入りて行きたり

斎藤 さいとう
茂吉 もきち

【鑑賞文】
まちなかを歩いていると、ちょうど、トランクが
ガレージ（車庫）へもどつてきたところに、でいい
ました。

いつたん路上にとまつたトランクは、バックして、
ガレージにはいろいろとします。それがいかにも、こ
れでだいじょうぶかな、ぶつけずにバックできるか
な、と、□A□が□B□のようにためらつてから、
すすつとはいつたのです。

それを見どけて、なんとなく、あれでいいんだ
など、また歩きだしました。

——作者は、トラックそのものに、
② じぶんの気

15

10

5

持ちをうつしこんでいます。それが「少しためら
ひ」のことばとしてあらわされました。この歌がよ
まれたころは、「ガレージ」も「トランク」も、あ
たらしいことばでした。短歌にはなりにくいやうな
情景を、うつしとつたのです。

〈桜井信夫「はじめてであう短歌の本【心の歌Ⅱ】」より〉

20

(1) — 線① 「ガレージへ トラックひとつ 入ら

むとす」とは、どのような様子をあらわしていま
すか。鑑賞文の中の言葉を使って答えなさい。

(2)

鑑賞文の **A**・**B** に入る言葉の組み合わ

せとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|----------|----------|
| ア | A ≡ トラック | B ≡ 生きもの |
| イ | A ≡ トラック | B ≡ 機械 |
| ウ | A ≡ ガレージ | B ≡ 生きもの |
| エ | A ≡ ガレージ | B ≡ 機械 |



(3)

— 線② 「じぶんの気持ち」とあります。作

者はこの短歌にどのような気持ちをうつしこんだ
ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しいものへのおどろきや感動を、読み手に
伝えたい気持ち。

イ 新しいものが町にあることへのためらいを、
読み手に伝えたい気持ち。

ウ 新しい言葉を使って短歌をよむことを楽しむ
気持ち。

エ 新しい言葉を使って短歌をよんでいいもの
か、迷う気持ち。



第十七講・確認テスト

かくにん

次の表現技法として正しいものを選びなさい。

1 ものごとをたとえることをなんといいますか。

- | | |
|-------|------|
| ア 反復法 | イ 比喻 |
| ウ 倒置法 | エ 連 |

2 同じ言葉をくり返すことをなんといいますか。

- | | |
|-------|------|
| ア 反復法 | イ 比喻 |
| ウ 倒置法 | エ 対句 |

3 言葉の順番を逆にすることをなんといいますか。

- | | |
|-------|-------|
| ア 比喻 | イ 擬人法 |
| ウ 倒置法 | エ 対句 |

4 人でないものを人にたとえることをなんといいますか。

- | | |
|-------|-------|
| ア 比喻 | イ 擬人法 |
| ウ 倒置法 | エ 対句 |

5 詩の一つのかたまり（文章でいう段落）のこと
をなんといいますか。

- | | |
|---------|------|
| ア 比喻 | イ 対句 |
| ウ くり返し法 | エ 連 |

第十八講・短歌②、俳句

□ 次の和歌を読んで、あとの間に答えなさい。

A 秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

B 五月雨の晴れ間にいでて眺むれば

藤原敏行

青田すゞしく風わたるなり

良寛

C 駒とめて袖打ちはらふかげもなし

さののわたりの雪の夕暮

藤原定家

(注) 駒＝馬のこと。

10

5

(1) Aの歌の——線「さやかに見えねども」の意味として最もふさわしいものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア さわやかには見えないけれど

イ 静かな感じに見えるけれど

ウ だんだんはつきりと見えてきたけれど

エ はつきりとは見えないけれど

(2) Bの歌を、五・七・五・七・七の句ごとに／の印を入れて区切りなさい。

五月雨の晴れ間にいでて眺むれば
青田すゞしく風わたるなり



(3)

Cの歌は、色彩の対照が美しい歌です。何の色と何の色ですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A 茶色の駒と真っ白い雪の野原
 イ 馬に乗る人の黒い姿と真っ白い雪の野
 ウ 赤く染まつた夕焼けの空と辺り一面の雪
 工 遠くの山の緑と真っ白い雪の野原



二

次の短歌を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

- A みちのくの母のいのちを 一目見ん
 一目みんとぞ いそげる
 斎藤茂吉
- B 夏の風山より来たり三百の
 牧の若馬耳ふかれけり
 与謝野晶子

5

D

晴れし空 あおげばいつも
 口笛をふきたくなりて

ふきてあそびき

石川啄木

C くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の
 針やはらかに春雨のふる
 まさおかしき

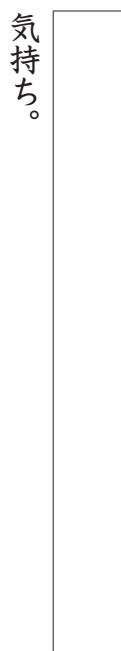
正岡子規

(1)

Aの歌について、次の問い合わせに答えなさい。

(あ) 線①「一目見ん一目みん」には、作者のどのような気持ちが表れていますか。「

気持ち。」に続く形で答えなさい。



気持ち。

(い) にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- ア たしかに イ なお
 ウ ただ ジ
 工 ただに



10

(2)

Bの歌について、次の問いに答えなさい。
 この歌によまれている情景として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 山からおりてきたたくさんの馬たちが風にふかれている。

イ 夏山に登つてさわやかな風を受け、喜んでいる馬たち。

ウ 山からふくさわやかな夏風に、若馬たちは気持ちよさそうにふかれている。

エ 山からふく冷たい風に、身のひきしまる

思いで作者も馬もふかれている。



(3)

Cの歌について、次の問いに答えなさい。
 ①――線②「くれなる」とはどんな色ですか。

最も近い色を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あわいピンク イ あざやかな黄緑
ウ こい赤 エ しづんだ黄色



様子

④――線③「やはらかに」は、薔薇の新芽の様子を表していますが、そのほかにも、もう一つの意味があります。何の様子を表していますか。「様子」に続く形で答えなさい。



(4)

あ

——線④

Dの歌について、次の問いに答えなさい。

ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

えなさい。

ア 見上げれば
イ 風を送れば
ウ 青ければ
エ 見つめると



①

この歌の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 快晴の日の空を見ているとかえって悲しみが増し、口笛をふいてごまかしているさ

びしさが感じられる。

イ 每日の苦労を忘れさせてくれる青い空に感謝の気持ちをこめて口笛をふくおだやかな春の日が目にうかぶ。

ウ 晴れわたった青空を見ていると、口笛を

ふいて遊んだ少年のころがなつかしく思い出される。
工 口笛が得意なので、みんなに聞かせたくなつていつもふいてしまう気持ちがよくわかる。



俳句

俳句とは、江戸時代の中ごろに成立した世界で最も短い定型詩で十七音から成り、季語がよみこまれている。

五
柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺
七
上の句 中の句 下の句

- ・字余り 音数が十七音より多くなること。
- ・字足らず 音数が十七音より少なくなること。

◆季語◆
季節を表す言葉。季節は旧暦きゅうれきによつて分けられていて、「歳時記」さいじきにすべての季語がのつていて、春(一~三月) のどか 彼岸 霞 朝寝 つ

ばめ かえる よもぎ 雪解
け 桜 たんぽぽ つくし

卒業 花見

夏(四~六月)

梅雨、五月雨 田植え 短夜
夕立 葉桜 若葉 いちご

秋(七~九月)

ほたる うちわ 風鈴
天の川 七夕 名月 台風

冬(十~十二月)

赤とんぼ 雁 朝顔 すいか
りんご 柿 もみじ すすき
らし 寒さ 大みそか 時雨 こが
七五三 ふとん 炭

白菜 風邪 クリスマス 落ち葉
枯れ草

◆表現技法◆

- ・句切れ 意味や調子が切れる
名月や // 池をめぐりて よもすがら
- ・切れ字 「や」「かな」「けり」など、句切れを起すことば

三 次の文章と俳句を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

俳句は、江戸時代、松尾芭蕉がかつやくしたころ（三百三十年ほど前）にさかんになりました。五・七・五の十七音で作られ、季節を表す「季語」をよみこむ約束になっています。ただ、音数は、短歌の場合もそうですが、いくらか増減があつてもかまわないことになっています。

5



（教科書書きおろしによる）

A 古池や蛙飛びこむ水のおと

松尾芭蕉

(2)

Aの俳句はどのような光景をよんだものですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 大きな池のほとりでの光景。
イ 静かな池のほとりでの光景。
ウ 美しい池のほとりでの光景。

季語

(1) Aの俳句の中から季語をぬき出し、その季節を答えましょう。

(3)

この文章で述べていることとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょ。

A 短歌や俳句には季節を表す「季語」をよみこむ約束がある。

I 短歌や俳句には音数のきまりがあるが、必ずしもその音数でなくてもよい。

U 『万葉集』が作られたのは千三百年以上も昔のことである。



四

次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 名月や池をめぐりてよもすがら

松尾芭蕉

あまりに月が美しいので、池をめぐりながら見とれていたらどうとう一晩過ごしてしまったよ。

B 雪とけて村いづばいの子どもかな

小林一茶

雪に閉じこめられていた長い冬がようやく終わり、春の陽ざしに、雪が段々ととけていく。子どもたちは待つてましたとばかり外に遊びを楽しみ始め、村は子どもでいづばいになつた。

C 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり

D 夏の蝶日かげ日なたと飛びにけり

高浜虚子

正岡子規

(1) A・Bの句の季語と季節を答えなさい。

A 季語

季節

B 季語

季節

(2)

C・Dの句の鑑賞文として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 色彩の対照が美しく、春ののびのびとした情景が思いうかぶ句。

イ 強い日ざしの快晴の夏の日、光の明暗を対照させた絵のような句。

ウ 秋の静けさが心にしみ、ふるさとへのなつかしさが伝わる句。

エ 秋晴れの澄んだ空が目にうかぶさわやかな句。

C

D

(五) 次の俳句と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

A とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな

① とんぼ

中村 汀女

【鑑賞文】

ふと立ち止まって空を見上げ、「まあなんと、こんなにたくさんのとんぼが飛んでいるのだわ」という句です。歩いていたときにも、とんぼの飛んでいたことは知っていました。とは言え、池があり、秋の草花があちらこちらにさく名園ですから、ほどほどそのほうに注意が向けられていたのでしょうか。立ち止まってはじめてとんぼの数多さに気がつき、まるで自分が立ち止まったために、とんぼが急にわき出してきたように感じたのです。

(鷹羽狩行「ジュニア版 目でみる日本の詩歌」15)

現代の俳句 より)

*名園＝三溪園。横浜にある日本式庭園。作者がこの庭園をおどされたときに作られた句。

B 海に出て木枯こがら⁽²⁾帰るところなし

山口誓子
やまぐちせいし

【鑑賞文】

「木枯」は、秋の終わりから冬の初めにかけてふく、北西寄りの季節風のことです。強い音をたてながらふきあれ、木々をふきからすことからこの名がつきました。冬の季語です。陸上をふきにふき、あれにあれた木枯らしも、やがて海上に出た。からすものも、さえぎるものもない海上を、当てもなくどこまでもふきわたつていく木枯らしには、もう、もどるべきところがない……。「帰るところなし」は木枯らしを人のように見た表現で、これによつて、やがて消えうせるしかない木枯らしのなげきが、伝わつてくるようです。

(鷹羽狩行「ジュニア版 目でみる日本の詩歌」⁽¹⁵⁾より)

30

25

20

(1) Aの俳句に使われている切れ字をぬき出しなさい。
い。

(2) 線①「あたりにふゆる蜻蛉かな」とあります、なぜ作者は「蜻蛉」が「あたりにふゆる」と感じたのですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 庭園の中でも、とんぼが多くいる池のまわりを歩いているから。

イ 作者の目は庭園の風景に向いていたので、立ち止まつたときにはじめてとんぼの数の多さに気づいたから。

ウ 草花の中で立ち止まつた作者におどろいて、蜻蛉が急にわき出してきたから。

エ 秋の草花を見て、はじめてとんぼが多く飛ぶ季節になつたことに気づいたから。



(3)

——線②「帰るどころなし」の説明として、鑑賞文の内容にあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 木枯に対する人間の気持ちで、冬がやつてきて外へ出られないことへの不満を表している。
- イ 木枯に対する人間の気持ちで、強い木枯で家に帰ることができなくなる不安を表している。
- ウ 木枯を人にたとえていて、海上に出てどこまでも行ける木枯の自由さが感じられる。
- エ 木枯を人にたとえていて、海上に出て行くあてのない木枯のさびしさが感じられる。



第十八講・**確認テスト**

かくにん

次の言葉はいつの季語なのか答えなさい。

I 入学式

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

2 梅雨

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

3 大根

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

4 天の川

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

5 雪解け

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

第十九講・大造じいさんとがん①（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

今年も、残雪は、がんの群れを率いて、ぬま地にやつてきました。

残雪というのは、一羽のがんに付けられた名前です。左右のつばさに、一か所ずつ、真っ白な交じり毛を持っていたので、かりゆうどたちから、そうよばれていました。残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい、なかなかりこうなやつで、仲間がえさをあさつていても、油断なく気を配つて、りょうじゅうのどどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。

大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていましたが、いつごろからか、この残雪が来るようになつてから、一羽のがんも手に入れることができなく

なつたので、いまいましく思つていました。

そこで、残雪がやつてきたと知ると、大造じいさんは、今年こそは、とかねて考えておいた、特別な方法に取りかかりました。それは、いつもがんのえさをあさる辺り一面にくいを打ちこんで、たにしを付けたうなぎばかりを、たたみ糸で結び付けておくことでした。じいさんは、一晩中かかるてたくさんのがんをうなぎばかりをしかけておきました。今度は、何だかうまくいきそうな気がしてなりませんでした。

翌日^よ日の昼近く、じいさんは、むねをわくわくさせながら、ぬま地に行きました。昨晩^{さくばん}、つりぱりをしかけておいた辺りに、何かばたばたしているものが見えました。

「しめたぞ！」
じいさんはつぶやきながら、夢中^{むちゅう}でかけつけま

した。

〔棕鳩十「大造じいさんとがん」より〕

30

- (1) —線①「残雪というのは、一羽のがんに付けられた名前です」とあります。が、残雪という名前が付けられたのはなぜですか。文章中の言葉を使つて答えましょう。

(2)

——線②「残雪は、このぬま地に集まるがんの頭領らしい」とあります。が、残雪を頭領だと思う理由としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 常に仲間に気を配り、がんの群れを率いていたから。

イ このぬま地をかり場としたころからずつといふがんだから。

ウ ほかのがんに比べて体が一回り大きかつたら。



(3) 大造じいさんと残雪の関係について、次の問い

に答えましょう。

かりゆうどの大造いさんにとって、残雪は
どのような存在そんざいでしたか。「～存在。」に続くよ
うに、文章中の言葉を使って六字で答えましょ
う。

存在。

（い） あのように思う理由を文章中の言葉を使って
答えましょう。

10 of 10

(4) 線③ 「何だからうまくいきそうな気がしてな

りませんでした」とあります。この気持ちが行動となつて表れている一文を文章中からぬき出し、初めの五字を答えましょう。

—

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

がんの群れは、思わぬごちそゝが四、五日も続いたので、ぬま地のうちでも、そこがいちばん気に入りの場所となつたようありました。

大造じいさんは、^①会心のえみをもらしました。

そこで、夜の間に、え場より少しほなれた所に、小さな小屋を作つて、その中にもぐりこみました。そして、ねぐらをぬけ出して、このえ場にやつてくる、がんの群れを待つてゐるのでした。

あかつきの光が、小屋の中に、すがすがしく流れこんできました。
②ぬま地にやつてくるがん



15

10

5

「しめたぞ！もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは目にもの見せてくれるぞ。」

りょうじゅうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしました。

ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやつてきました。そして、ふと、いつものえ場に、昨日までなかつた、小さな小屋をみとめました。

「^③様子の変わつた所に近づかぬがよいぞ。」

かれの本能は、そう感じたらしいのです。ぐつと急角度に方向を変えると、その広いぬま地の、ずっと西側のはしに着陸しました。

もう少しで、たまのとどくきよりに入つてくるといふところで、またしても、残雪のために、^④してやられてしまいました。大造じいさんは、広いぬま

20

25

30

地の向こうをじつと見つめたまま、

「ううん。」

どうなつてしましました。

今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にがんの来る季節になりました。

大造じいさんは、生きたどじょうを入れたどんぶりを持って、鳥小屋の方に行きました。じいさんが小屋に入ると、一羽のがんが、羽をばたつかせながら、じいさんに飛びついてきました。

このがんは、二年前、じいさんがつりばりの計略^{りくやく}^⑤で生けどつたものだつたのです。今では、すつかり、じいさんになつていました。ときどき、鳥小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュ、ヒュ、ヒュと口笛をふけば、どこにいても、じいさんの所に帰ってきて、そのかた先にとまるほどに慣れていました。

大造じいさんは、がんがどんぶりからえさを食べているのを、じつと見つめながら、

「今年は、ひとつ、これを使ってみるかな。^⑥」
と、独り言を言いました。じいさんは、長年の経験^{ひとと}で、がんは、いちばん最初に飛び立つたものの後にについて飛ぶ、ということを知っていたので、このがんを手に入れたときから、ひとつ、これをおどりに使って、残雪の仲間をとらえてやろうと考えていたのでした。

〔椋鳩十「大造じいさんとがん」より〕

(1)

——線①「会心のえみをもらし」たときの大造じいさんの気持ちとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア がんがたくさんわなにかかったので喜んでい

る。

イ がんがたくさんえ場に集まってきたので喜んでいる。

ウ え場近くに小屋を作ったことに満足している。



(2)

——線②「ぬま地にやつてくるがんのすがたが、かなたの空に、黒く点々と見えだしました」とあります。これは一日のうちのいつごろですか。



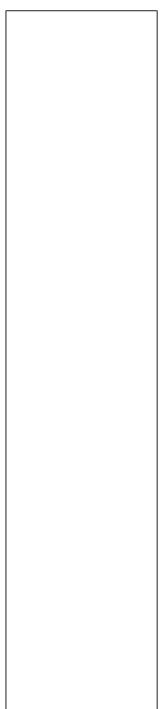
(3)

(3) 大造じいさんのきんちょうしている様子がもつともよく表現されている部分を、文章中から十六字でぬき出しましょう。



(4)

——線③「様子の変わった」とありますが、どのように様子が変わったのですか。文章中の言葉を使って答えましょう。



(5)

——線④「してやられて」の意味とともにともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

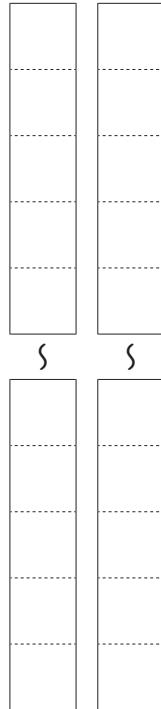
ア こちらの力を思い知らせて
イ 自信をなくして
ウ うまくかわされて



(6)

——線⑤「すっかり、じいさんになつていいました」とあります。が、じいさんになついている様子がえがかれている文を二つぬき出し、それぞれ初めと終わりの五字を答えましょう。(、や。も

一字に數えます。)



(7)

——線⑥「今年は、ひとつ、これを使ってみるかな」とあります。が、じいさんは、がんのどのような特性を利用してしようと考えたのですか。「」という特性。」に続くように文章中からぬき出します。

という特性。

(8)

——線⑦「このがん」とは、どうやって手に入れたがんですか。文章中の言葉を使って答えましょう。



第十九講・確認テスト

かくにん

次の言葉はいつの季語なのか答えなさい。

1 入道雲

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

2 桜

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

3 小春
日和

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

4 赤んぼ

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

5 名月

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

ア 春

イ 夏

ウ 秋

エ 冬

第二十講・大造じいさんとがん②（物語文）



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

がんの群れを目がけて、白い雲の辺りから、⁽¹⁾何か一直線に落ちてきました。

「はやぶさだ。」

がんの群れは、残雪に導かれて、実際にすばやい動作で、はやぶさの目をくらませながら、飛び去って

5

いきます。

「あ！」

一羽、飛びおくれたのがいます。大造じいさんのおとりのがんです。長い間飼い慣らされていたので、野鳥としての本能⁽²⁾がぶつっていたのでした。

はやぶさは、⁽³⁾その一羽を見のがしませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと、口笛をふきました。こんな命がけの場合でも、⁽³⁾飼い主のよび声

10

を聞き分けたとみえて、がんは、こっちに方向を変えました。

はやぶさは、その道をささえぎって、ぱあんと、一けりけりました。ぱつと、白い羽毛が、あかつきの空に光って散りました。がんの体は、ななめにかたむきました。もう一けりと、はやぶさがこうげきの姿勢⁽⁴⁾をとったとき、さつと、大きなかげが空を横切りました。残雪です。

大造じいさんは、ぐつと、じゅうをかたに当てて、残雪をねらいました。が、何と思つたか、⁽⁴⁾また、じゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もはやぶさもありませんでした。ただ救わねばならぬ、仲間のすがたがあるだけでした。いきなり、敵⁽⁵⁾にぶつかつていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。（椋鳩十「大造じいさんとがん」より）

25

20

15

(1) 線②「その一羽」とは、何のことですか。

文章中から十三字でぬき出しましょう。

(2) 線③「飼い主」とはだれですか。

(3) 線④「また、じゅうを下ろしてしまいました」とありますが、その理由としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

たとえば、その理由としてつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 自分の力では、残雪をうつことはとても無理だと思ったから。

イ 残雪のすばやさに、どうしてもねらいが定まらなかつたから。

ウ 残雪が、おとりのがんを助けようとしている

ことに気づいたから。
工 残雪とはやぶさの戦いを、じっくり見物しようと思つたから。

(4) この文章の特ちようを述べたものとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えましょう。

ア 出来事を、時間の経過にしたがつて細かく表現している。

イ 大造じいさんの心の動きをていねいに表現している。

ウ 大造じいさんのおとりのがんとはやぶさの戦う様子を、力強く表現している。

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

残雪の目には、人間もはやぶさもありませんでした。ただ救わねばならぬ、仲間のすがたがあるだけでした。いきなり、敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、力いっぱい^①相手をなぐりつけました。

不意を打たれて、さすがのはやぶさも、空中でふらふらとよろめきました。が、はやぶさもさるもの

です。さつと体勢を整えると、残雪のむなもとに飛びこみました。

ぱつ
ぱつ

羽が、白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました。

した。そのまま、はやぶさと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。が、はやぶさ

は、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら、飛び去っていきました。

残雪は、^②むねの辺りをくれないにそめて、ぐつたりとしていました。しかし、^③第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぶつて、ぐつと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる^{どうりよう}態度のようでありました。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もう、じたばたさわぎませんでした。^{さいご}最期のときを感じて、せめて、頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。大造じいさんは、^④強く心を打たれて、ただの鳥に対しているような気がしませんでした。

残雪は、大造じいさんのおりの中で、一冬をこしました。春になると、そのむねのきずも治り、体力も元のようになりました。

ある晴れた春の朝でした。

^⑤じいさんは、おりのふたをいつぱいに開けてやりました。残雪は、あの長い首をかたむけて、とつぜんに広がった世界におどろいたようありました。が、

バシッ！

快い羽音一番。一直線に空に飛び上りました。

^⑥らんまんとさいたすももの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「おうい、がんの英ゆうよ。

おまえみたいなえらぶつ

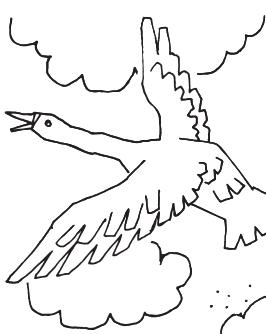
を、おれは、ひきょうな

やり方でやつつけたかあ

ないぞ。なあ、おい、今

年の冬も、仲間を連れて

ぬま地へやってこいよ。



50



45

40

35

また、堂々と戦おうじゃあないか。』

大造じいさんは、^⑦花の下に立つて、こう、大きな声で、がんによびかけました。そして、残雪が北へ北へと飛び去つていくのを、はればれとした顔つきで見守つていました。

^⑧いつまでも、いつまでも、見守つていました。

〔棕鳩十「大造じいさんとがん」より〕

55

(1) 線①「相手」とは、だれ(何)ですか。

(2) 線②「むねの辺りをくれないにそめて」とあります
が、これはどんな様子を表していますか。

次の中からもつともふさわしいものを選び、記号
で答えましょう。

ア 残雪が大きなけがをしている様子。

イ 残雪が戦いに勝った様子。

ウ 残雪が非常に興ふんしている様子。

(3) 線③「第二のおそろしい敵」とはだれ(何)
ですか。

(4) 線④「強く心を打たれて」とあります
が、大造じいさんは残雪のどんな様子に「強く心を打
たれ」たのですか。文章中の言葉を使って、
二十五字内で答えましょう。

(5) 線⑤「じいさんは、おりのふたをいっぱい

に開けてやりました」とありますが、何のために
そうしたのかを述べた次の理由のうち、ふさわし
くないものを選び、記号で答えましょう。

ア 残雪の仲間をよび寄せるおとりにするため。

イ 残雪を仲間のところへ帰すため。

ウ 残雪とまた今年の冬、堂々と戦うため。

(6) — 線⑥「雪のよう清らかに」は、何のどんな様子を表していますか。

な様子を表していますか。

(7) — 線⑦「花」とありますが、どんな「花」ですか。

文章中から十三字でぬき出しましょう。

(8) — 線⑧「いつまでも、いつまでも、見守つて
いました」とあります。このときの大造じいさ
んの気持ちとしてもつともふさわしいものを次の
中から選び、記号で答えましょう。

ア これまでまたいつか、残雪が仲間を連れてや
どつてくれれば、今度こそこちらの力を見せてや
れる、と期待する気持ち。

イ いっしょに一冬を過ごしたことで別れをつら
く思いながらも、残雪の無事をいのるやさしい
気持ち。

ウ 強力な敵を助けてやれたことの満足感と、残
雪のすばらしさをたたえる気持ち。

第二十講・確認テスト

かくにん

次の□に当てはまる身体の一部を入れ、慣用句を作りなさい。

1 □が出る——お金が足りなくなること

ア 手 イ 足 ウ 頭 エ 目

2 □が軽い——おしゃべりであること

ア 口 イ 手 ウ 足 エ 鼻

3 □が空く——時間ができること

ア 足 イ 頭 ウ 手 エ 頸
ひざ

4 □にかける——自慢すること

ア 鼻 イ 手 ウ 足 エ 首

5 □をたてにふる——うなづくこと

ア 手 イ 足 ウ 頭 エ 頸
ひざ

第二十一講・宮沢賢治①(伝記)



一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

宮沢賢治は、自分の理想とする世界を求めてはげしく燃え続けた、太陽のような人であつた。人間も動物も自然も一つになつて、心を通い合わせることのできる「まことの幸せ」がどこかにありはしないかと、生涯をかけてさがそうとした。

賢治童話の舞台は、目の前の林や野原であつたり、風のふく山の中であつたり、星のかがやく夜空であつたり、いつもわたしたちの身近にある場所だ。それでいて、わたしたちをたちまち不思議な世界へ運びこんでくれる。まるで昔話のように、人も動物も精霊もいつしょになつて登場する。

そのためには、自分の肉体がどうなつてもいいと考えた。**教師**になつて、自分の理想を説き、**自ら農民**になつて土に生きる者の悲しみを知ろうとした。しかし、**理想と現実**はあまりにもちがいすぎた。宗教に学んでも、自然のふところに飛びこんでも、賢治のはげしい思いをとげることはできなかつた。それならば、せめて童話の中で自分の夢を実現したいと、身をけずる思いで作品を書き続けた。

（西本鶴介「宮沢賢治」より）

(1) 筆者は、宮沢賢治をどんな人だと考えていますか。それが分かる部分を文章中からぬき出し、初めと終わりの五字を答えましょう。

5

(2) — 線① 「理想と現実」とありますが、「理想」と「現実」のそれぞれについて分かる一文の、初めの三字を文章中からぬき出しましょう。

理想

現実

(3) 賢治が童話を書き続けたのはなぜですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア 理想を説きながら農民とともに生活をした現実を、童話の世界で表現したかったから。

イ 理想の世界と現実の世界のちがいを体験し、童話の中で理想とする世界を実現したかったから。

ウ 理想と現実のちがいを童話にしたいというはげしい思いがあつたから。

(4)

— 線② 「賢治童話」とは、どのような童話ですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

- ア 身近な場所が舞台だが、どこか不思議な童話。
- イ 身近な昔話のように、どこにでもあるそばくな童話。
- ウ 身近な場所に精霊などが登場し、少しこわい童話。

二題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えましょう。

賢治は、植物や石ころを集めるのが大好きな少年であつた。盛岡中学校へ通うようになると、ひとりで岩手山へ登り、植物や鉱石を採集しながら、自然のきびしさと豊かさを学んだ。

① 中学を卒業しても、賢治には自然のみりょくがわ

5

すれられなかつた。このまま家にいて、父の仕事を手伝おうという気持ちが起きてこないのだ。そのころ、たまたま読んだ宗教の本に深く感動した賢治は、店のあとをつぐより、いつか世の中のためになる仕事がしたいと考えるようになった。

一九一五年（大正四年）、賢治は、盛岡高等農林学校へ進学することを父から許された。中学時代に繞き、野山をかけめぐり、地質や土の科学調査と実験に打ちこんだ。



15

10

て帰つた石のかけらや土をけんび鏡で調べた。単調な仕事にあきてくると、賢治は仕事をことをわすれて、石や土の不思議な模様をながめた。
（命のないものでも、こんなにすばらしい美しさを持つている。）
それは、美しい空想となつて、どこまでも広がつていく。

（この美しさを文章にすることができるたら、どんなにすてきだろう。）

賢治は、急に童話が書いてみたくなつた。その気持ちを詩にうたいたくなつた。童話の中では、現実にできないことがいくらでもできる。現実には見えないものまで見ることができ。動物も人間も自由に言葉がかわせる。だれもが仲良くくらせる理想的な世界だつてつくることができる。こうして、賢治は童話を書き始め、心にうかぶ思いを詩に書いた。

（西本鶴介「宮沢賢治」より）

20

25

(1) 賢治はどのような少年でしたか。文章中からぬき出しましょう。

から。

(2)

——線①「中学を卒業」したころ、賢治はどのようなことを考えるようになりましたか。文章中からぬき出しましょう。

(3)

賢治が(2)のように考えるようになったのは、どんなことがあつたからですか。文章中の言葉からぬき出しましょう。

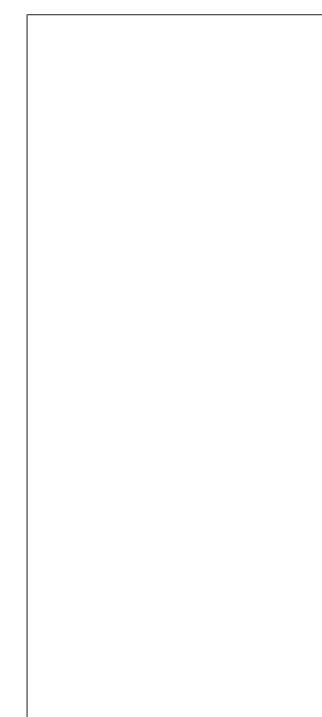
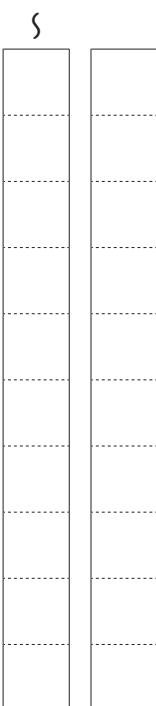
(4) — 線②「命のないもの」とは、ここでは何を指していますか。文章中から三字でぬき出しましょう。

(5)

——線③「その気持ち」とは、どんな気持ちですか。文章中の言葉を使って答えましょう。

(6)

賢治は童話を書くことで、どのようなことができると考えたのですか。それが分かる部分の初めと終わりの十字をぬき出しましょう。(、や。も一字に數えます。)



第二十一講・確認テスト

かくにん

次の□に当てはまる身体の一部を入れ、慣用句を作りなさい。

1 □が立つ——めんぱく面目が立つこと

ア 頭 イ 体 ウ 顔 エ 足

2 □が早い——うわさなどをすぐに聞きつけること

ア 耳 イ 口 ウ 目 エ 耳

3 □がうまい——だますのが上手なこと

ア 鼻 イ 口 ウ 目 エ 耳

4 □が黒い——心に悪だくみがあること

ア した イ 心 ウ 胸 エ 腹

むねはら

5 □が棒になる——つかれはててしまうこと

ア 足 イ 手 ウ ひじ エ 目

第二十一講・宮沢賢治(2)（伝記）



一題目 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えましょう。

その後、一九二一年（大正十年）、稗貫農学校の教師になつたが、童話や詩を書けば書くほど、きびしい自然の中で生きる^①農民たちへの熱い思いがわいてくる。

（教師として、生徒たちをりっぱに育てることも大切な仕事である。だが、それだけで、本当の農民の苦しみは分からない。雨がふれば、大水で田んぼが流れされ、日照りが続ければ、いねがかかるのを感じつゝ見て、いるほかにどうすることもできない人たち。その人たちのことを思うと、このまま教師をしてはいられない。その人たちといつしょになつて働き、その人たちのために、今すぐ役立たなくてはならないのだ。）

10

そう思うと、もうがまんができなかつた。一九二六年（大正十五年）、賢治は、校長や両親の止めるのをふり切つて、きつぱりと教師をやめ、自ら農民として生きることを決心した。

賢治は、北上川のほとりの、林に囲まれたおかの上の家に、ひとりで住むことにした。この家は、妹のとし子が静養をしていた所である。とし子がなくなつた後、ずっと空き家になつていた。

賢治は、大工さんにたのんで、いたみかけた土台を取りかえ、階下の部屋を造りかえてもらつた。ここへ農民たちを集め、新しい未来について話し合おうと、二階は書きにして、農作業のできない日は、読

20

15

書をしたり文章を書いたりすることにした。

賢治は、この家にこしてくると、さつそくあれた土地を切りひらいて畑を作り、なす、かぼちゃ、きゅうり、トマトなどのなえを植えた。朝は暗いうちに起きたし、夜おそくまでどろまみれになつて働いた。

食べる物といえば、げん米とみそしると野菜ぐらいなもので、肉類はいつさい口にしなかつた。ふろに入る代わりに、いど水で体をふいた。

こんなくらしをしていると、農民たちの苦労がいいたいほどによく分かる。賢治にとつては、これまでのどんな生活よりもすばらしいものに思えてくる。この生活からは、人間のみにくい欲望はいつさいわいてこない。自然のふところにだかられて、宗教の教えを守り、農民たちのためにつくすだけである。

ある日、農学校の卒業生が、この家にたずねてきたとき、賢治は



45

40

35

30

破れたシャツ一枚でねむつていた。うでは、ぶゆにくわれてはれあがり、足首には、くわで切つた傷口があつた。それなのに包帯もせず、ヨードチンキがぬつてあるだけだ。

(どうして、こんなにまでして、自分自身を苦しめるのだろうか。)

卒業生は、賢治の変わり果てたくらしぶりにむねがいっぱいになつた。やがて、目を覚ました賢治に、

卒業生が言つた。

「先生、その傷口からばいきんでも入つたらどうするのです。」

すると、賢治は、^③ わざこと傷口をたたいてみせ、「だいじょうぶ。おかげで、わたしも一人前の農民になることができそうだ。初めは、一時間も働くと体がいたくてたまらなかつたが、今じや何時間働いても平氣です。」

と言つた。

（西本鶴介「宮沢賢治」より）

65

60

55

50

(1) 線①「農民たちへの熱い思い」とあります
が、どのように思いますか。次の中からもつとも
ふさわしいものを選び、記号で答えましょう。

ア きびしい自然の中で働いてくれている農民へ
の感謝の思い。
かんしゃ

イ きびしい自然の中で苦労している農民たちの
ために何かをしたいという思い。

ウ きびしい自然に立ち向かっている農民たちの
生き方にあこがれる思い。



(2) 賢治が教師をやめたときの気持ちとしてもつと
もふさわしいものを次の中から選び、記号で答え
ましょう。

ア 教師がいやでたまらず、自由になりたいとい
う気持ち。

イ 自分には教師の仕事は向いていないとあきら
める気持ち。

ウ 教師も大切だが、自分は農民になり、農民の
ために働きたいという強い気持ち。

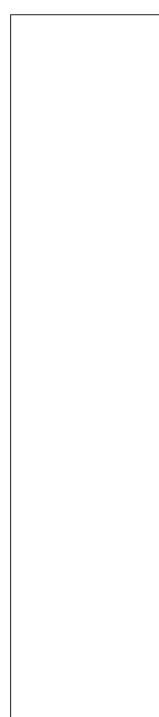


(3) 教師をやめた賢治は、どこにある家に住みまし
たか。文章中からぬき出しましょう。

(4)

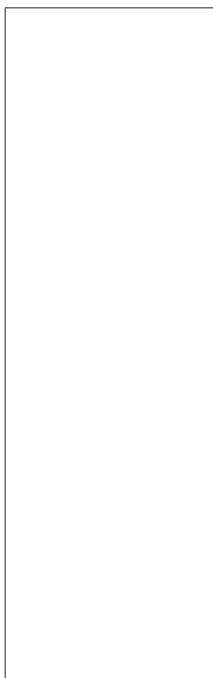
賢治は、次の部屋をどのような部屋として使お
うとしましたか。それぞれ答えましょう。

Ⓐ 階下の部屋



④

二階の部屋



(5)

——線②「こんなくらし」とあります。が、賢治はどのように考へてはどうのようなくらしをしていたのですか。次の点について、それぞれ二つずつ簡単に答えましょう。

あ 賢治の働きぶりについて

(i) 賢治の衣食住について

(6)

(5)のようなくらしを、賢治はどうのよう考へていますか。文章中から二十字以内でぬき出しましょう。

(7)

——線③「わざと傷口をたたいてみせ」たのは、なぜですか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えましょう。

ア 心配する卒業生を安心させたかったから。

イ 卒業生の言うことをばかげていると思つたから。

ウ 自分が一人前の農民に近づいたと示したかつたから。

第二十一講・確認テスト

かくにん

次の□に動物を入れてことわざを完成させなさい。

1 □も歩けば棒に当たる

ア 犬 イ ねこ ウ 豚

ぶた
牛

2 □をかぶる

ア 犬 イ ねこ ウ 鳥

とり
魚

3 月と□

ア かめ イ つる

つる

ウ ビじょう エ すっぽん

すっぽん

4 泣きつ面に□

ア かぶと虫 イ はち
ウ みみず 工 ちょうちよ

5 □の耳に念佛

ア 牛 イ 馬 ウ 犬

エ 工 ねこ

第二十三講・人間の覚悟（説明文）

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

① 「登山」という言葉を聞くと、私はいつも不完全な言葉のような気がします。なぜなら、登山した人は必ず下山をします。登ったきりで終わるわけではなく、山登りには必ず山下りというのがあって、登

山に成功したなら今度は安全に下界までたどりついてはじめて「登山が成功」したことになるからです。

② 登頂することだけが③ 山の目標ではない。きちんと安全かつ優雅に山を下つていくことが、人間にとつて大切なのだと私は思います。

重い荷物を背負ってひたすら頂上をめざしている最中は、下界をふりかえる余裕もなく勢いをつけて必死で登っていく。そこには、やがてあの峰に登れるのだと思える喜びがあります。しかしながら下りて

10

5

いくときには、何かを達成したという満足感と心のゆとりがうまれているはずです。

ゆつたりと下界を眺めると、遠くに海があるのは北アルプスが、町並みが見えたりもする。「ああ、あれはあんなところにあったのか」と眼下の世界を*俯瞰しながら、自分の足元に目を移すと、高山植物が綺麗な花をつけている。「よくもこんな高いところで、可愛らしい、美しい花をつけるものだな」と小さな花を*めでたり、思いもかけず雷鳥をして、うれしくなったりするのだろうと思うのです。

（五木 寛之「人間の覚悟」より）

*俯瞰=高いところから見おろすこと。
*めでる=美しさを味わい楽しむこと。

20

15



(1) — 線①「『登山』という言葉を……気がします」とあります。筆者はなぜ「不完全な言葉」と感じますか。それを説明した次の文の□にあってはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

「登山」とは  だけでなく、安全

に  がてきて、はじめて成功した

ことになると、筆者は考へていてるから。

(2) — 線②「登山の目標」とあります。筆者の考へる『登山の目標』としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山の頂上めざして、ひたすら勢いよく登ること。

イ 山の頂上に登れなくても、安全に下りてくること。

ウ 山の頂上に登れなくても、優雅に下りてくること。

工 山の頂上に登り、安全かつ優雅に下りてくること。

(3)

— 線③「優雅に山を下っていく」とは、具体的にはどうすることですか。ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かを達成したという満足感をもって山を下りること。

イ 周りの景色を見る心のゆとりをもって山を下りること。

ウ 周りの景色を見る余裕もなく急いで山を下りること。

エ 美しい花やめずらしい鳥をめでながら山を下りること。



(4)

この文章の要旨としてふさわしいものを次の
中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登山の成功とは、周囲の景色を眺めながら登

頂することである。

イ 登山の成功とは、頂上に登り、無事に下山す
ることである。

ウ 達成感と満足感を得るために、登山をすべ
きである。

エ 心に余裕のある人だけが、登山に成功するこ
とができる。



【一題目】次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

そろそろ覚悟をきめなければならない。

最近、しきりにそんな切迫した思いがつよまってきた。

以前から、私はずっとそんな感じを心の中に抱いて、日をすごしてきていた。しかし、このところ、もう^{*}躊躇^{ちゅうちよ}している時間はない、という気がする。

いよいよこの辺で覚悟するしかないな、と諦める

覚悟がさだまってきたのである。「諦める」というのは、投げ出すことではないと私は考える。「諦める」

は、「明らかに究める」ことだ。はつきりと現実^{げんじつ}を見すえる。期待感や不安などに目をくもらせるこ

となく、事実を真正面から受けとめることである。

では、「諦める」ことで、いつたい何が見えてくるのか。

「絶望の^{*}虚妄なることは、まさに希望と^{あいおな}同じい」と、魯迅^{ろじん}は言った。絶望も、希望も、ともに人間

の期待感である。その二つから解き放たれた目だけが、「明らかに究める」力をもつのだ。

* 踌躇^{*}||ためらうこと。

* 虚妄^{*}||うそ。眞実ではないこと。

（五木 宽之「人間の覚悟」より）

(1)

——線①「諦める」とあります。筆者の考える「諦める」としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 途中で投げ出さないこと。

イ はつきりと現実を見すこと。

ウ 期待感や不安などに目をくもらせること。

エ 事実を真正面から受けとめること。



(3)

この文章の要旨としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は、最後まで人生を諦めずに努力するこ

とが大切だ。

イ 人生は短いので、ためらわずに行動することが必要だ。

ウ 人間には、くもりのない目で現実を直視する覚悟が必要だ。

エ どんなときも生きる望みを失わないでいる覚悟が大切だ。



第二十三講・確認テスト

かくにん

次の□に動物を入れてことわざを完成させなさい。

1 一石二□

ア 虫 イ 鳥 ウ 牛 エ 馬

2 □にこばん

ア ねこ イ 犬 ウ 馬 エ 豚

3 飼い□に手をかまれる

ア ねこ イ 犬 ウ 馬 エ 豚

4 立つ□あとをにごさず

ア 馬 イ 犬 ウ 鳥 エ 鳥

5 井の中の□、大海を知らず
ウ ア 魚
蛙 かわず
イ くじら
エ いるか

第二十四講・花を食べる

一題目 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

湯飲み茶わんに、あわいピンクの八重桜の花がういている。桜湯である。めでたいことがあるときに、お茶の代わりに飲むとされているが、きみたちは飲んだことがあるだろうか。また、魚のさしみをもつた皿に、小さなきくの花が置いてあることがある。これを食べたことがあるだろうか。あんなもの食べられるのかと思った人もいるだろう。あんなものどころか、そこには、日本人のちえがかくされているのである。そのちえとはどんなものかさぐってみよう。

10

5

きた。どんな花を食べたかというと、桜やきくはもちろん、たんぽぽ、すみれ、つばき、ぼたんの花まで食べたのである。

きみたちの中には、たんぽぽなら食べたという経験の持ち主がいるかもしれない。その人は、きっと山菜や薬草にくわしい人が身近にいて、たんぽぽを使った料理をしてくれたのにちがいない。^①たんぽぽの料理には、花びらとエビのすみそあえ、花のてんぷらなどがある。また、わかい葉を使つたたんぽぽサラダや、根を使つたかきあげ、きんぴらがある。おどろくことに、たんぽぽご飯やたんぽぽコーン也有一些。

25

20

15



を食べるといつても、わたしたちは、食べやすいようないつそうのくふうをしているのである。これは、食べ方の A である。

では、花を食べることには、どんな意味があるのだろうか。

食べた花を調べてみると、花粉やみつには、リンや鉄、カルシウムのようなミネラル類や、ビタミン類が豊富にふくまれている。このため、花を食べる

ことは、昔のそまつな生活のなかにあって、きちょうな栄養分をとる一つの方法になっていたことがある。

そればかりではない。花を食べることを通して、

日本人は、食べられる花と毒の花、うまい花とまずい花、体のためによい花と食べ過ぎるとよくない花などを、正確に区別してきた。

そして、区別とともに、⁽²⁾ それぞれの花に合う使い道を考えてきたのである。

まず第一は、薬として使う。ももの花やつぼみは、にょうがよく出るようだ。こぶしの花は、鼻の病気

などを治すために。ふきのとうは、胃をじょうぶにするために、また、せきをしずめるために。

第二は、味として使う。つつじやさつきの花びらのすっぱい味。ふきのとうや菜の花の苦い味。花さんしようのからい味。桜花や梅のつぼみのしぶい味など。

第三は、においとして使う。きく、桜、ゆず、しその花など、自然のかおりを楽しむ。

第四は、見た目を喜ばせるために使う。桜やももの花を湯にうかせて、その花ごと飲んだり、花びらの小さい花々を料理にそえたりする。

実際に豊かな使い方、味わい方だと言うことができ

よう。

現代のわたしたちが食べる花は、桜やきくのよくな伝統的なものばかりではない。たとえば、ニセアカシアの花をすすめる人は、あまくてみりょく的なかおりと味を、年に一度は楽しみたいと言っている。てんぶらにしたり、バターいためにしたり、また、花をしごいて熱湯をかけ、サラダにしたりして食べ

て いる そ う で あ る。

この よ う に、花 を 食 べ る 日 本 の 伝 統 的 な ち え は、

今 日 に も 受 け つ が れ、さ ざ ら に 発 展 ⁽³⁾ させ ら れ て も い る。

む ろ ん、⁽³⁾ 世 界 の ど の 国 も、そ れぞ れ に す ぐ れ た 食 文 化 をも つ て い る。多 く の 花 を い ろ い ろ な 形 で 味 わ い、樂 し む こ と は、日 本 人 の 育 て て き た す ぐ れ た 食 文 化 の 一 つ で あ る。そ れ は、こ れ か ら も 生 か し て い くこ と が 望 ま れ る も の で あ る。

〈小泉 武夫「花を食べる」より〉

70

(1)

——線① 「たんぽぽの料理」として筆者が挙げて いるものを次の 中から全部選び、記号で答えるさい。

- | | | | |
|---|---------|---|--------|
| ア | 花のてんぷら | イ | 葉のコーヒー |
| ウ | 根のかきあげ | エ | 葉のサラダ |
| オ | 根のすみそあえ | | |

(2)

A に あ て は ま る 言 葉 を、文 中 か ら 平 仮 名 ^{ひらがな} 二

字 でぬき出しなさい。



(3)

花を食べることは、栄養面ではどんな意味がありますか。次の文の □ a・b にあてはまる言

葉を文中からそれそれぬき出した。い
花には、リンや鉄、カルシウムなどの
b が豊富にふくまれており、昔から人々の
c ちような栄養分となつていた。

b a

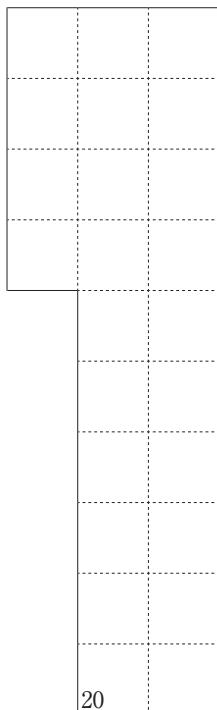
(4) 線②「それぞれの花に合う使い道」として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 桜やさつきの花は、見た目を喜ばせるために使う。

イ つつじや花さんしょうは、すっぱい味として
使う。
ウ ふきのとうは、せきをしずめるための薬とし
て使う。

工 梅やしその花は、自然のかおりを楽しむため
に使う。

（5）
一線③「世界のどの国も、それぞれにすぐれた食文化をもつていて」とあります。筆者が述べている日本のすぐれた食文化とは、どのようなことですか。文中から二十字前後でぬき出しなさい。



第二十四講・確認テスト

かくにん

次の熟語の組み立てとして正しいものを、あとからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|---|----|
| 1 | 通行 |
| 2 | 開会 |
| 3 | 青空 |
| 4 | 前後 |
| 5 | 乗馬 |

ア 似た意味の漢字を組み合わせたもの

イ 反対の意味の漢字を組み合わせたもの

ウ 上の漢字が下の漢字の意味をくわしくしているもの

エ 動作を表す漢字の下に「～を」「～に」という目的を表す漢字が来るもの

解 答 編

小学5年 国語 [基礎]

第一講 少年たちの夏① (物語文)

一題目

(1) ④六月にはいつてすぐの土曜日
⑤学校からの帰り道

(3) 竹・一そういかだ
(2) ア

二題目

(3) (2) (1)
イ ア 工

1 イ
2 イ
3 ウ
4 イ
5 イ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

小5 国語 基礎 テキスト 解答

一題目

(1) A
B
ア

- (2) (例)渦をぬけて、そとにうかんでいたから。
(3) イ

二題目

(1) 満足していた

(2) A
B
ア
ウ

- (3) どんなおとな
(4) (例)圭造がちゃんとした人間かどうかは、ぼくが決めることではないと
思ったから。

〈確認テストの解答〉

- 1 ウ
2 工
3 イ
4 工
5 工

小5 国語 基礎 テキスト 解答

	(3)	(2)	(1)	季節	テキスト	二題目	(3)	(2)	(1)	一題目
1 イ イ イ テ スト の 解 答				来年・前年・花の芽	B 才	4	A ア		三つ目 二つ目 一つ目	5 2 1
2 ウ										3
3 工										4
4 ア										
5 ア										

小5 国語 基礎 テキスト 解答

一題目

- (1) 千三百年以上前(のもの)
(2) あ
① 材料
木材の組み合わせ(木組み)
② 屋根を支える仕組み
③ しなやかさ(しなやかだ)

二題目

- (1) はかいの力・きしみ
(3) 全体がしなやかさを生む

- 1 A 工
2 B ウ
3 イ
4
5 ウ

1、主語と述語

① 2、修飾語

(6) 主語	(5) 主語	(4) 主語	(3) 主語	(2) 主語	(1) 主語	4	(5) 主語	(4) 主語	(3) 主語	(2) 主語	(1) 主語	3	(3) イ	(2) 工	(1) 工	2	(3) ウ	(2) ウ	(1) イ	1
…	…	…	…	…	…		…	…	…	…	…		…	…	…		…	…	…	
×	ウ	工	×	工	ア		工	工	×	イ	イ		述語	述語	述語	述語	述語	述語	述語	
才	才	才	才	才	才		イ	才	才	工	工		述語	述語	述語	述語	述語	述語	述語	
才	才	才	才	才	才		イ	才	才	工	工		述語	述語	述語	述語	述語	述語	述語	

1 ウ	（確認テストの解答）	(3) 工	(2) ア	(1) ウ	4	(3) ウ	(2) ア	(1) 工	3	(3) ①顔を ②見せる	(2) ①ある ②かく	(1) ①犬を ②わり引きが	2	(2) ア・ウ (1) ア・イ・ウ (順不同)
2 工														
3 イ														
4 ア														
5 工														

小5 国語 基礎 テキスト 解答

		四題目		三題目		二題目		一題目	
1 工	（3） ウ	（2） ア	（1） 夏休み・夕立	（4） イ	（3） イ・エ	（2） 倒置法	B A	（1） ウ	（1） ウ
2 工	（2） ウ	（1） ア	（順不同）	（3） 雲の悲しみがわかる	（2） か	（1） なしみ		（3） 冬・春	（2） 木の芽
3 イ									
4 エ									
5 ア									

小5 国語 基礎 テキスト 解答

一題目

(1) だれが…恵(が)
どこへ…純子の家(へ)

(2) イ
(3) 白い自動車・かかえこんでとびのく
(4) ア

二題目

(1) 八月十五日

(2) 工

(3) ありのままのこと
(4) (例)自分は生きて帰れないだろうと思う気持ち。
(5) 例えば、自

1 ウ
2 ア
3 イ
4 工
5 イ

<確認テストの解答>

一題目

(4) (3) (2) (1)
㊂(例) 検討すべき課題が多く残されている
①(例) 予想を大幅に上回る協力を得られた

1 工 2 工 3 イ 4 工 5 工
〔確認テストの解答〕

一題目

- (1) ア
(2) 飲み物の温度を保てる(から)
・自分に合った量を用意できる(から)
- (3) 七月一日の
(順不同)

(3)

解答

二題目
(1) 賛成
(2) イ
(3) (例)かん境に良いこと。

- ・(例)飲み物の温度を保てる(ものがある)こと。
・(例)ほかの人の飲み物とまちがえることがないこと。

(順不同)

(4) (例)わたしは、このろん題に反対です。

なぜなら、水とうを持つていくと、荷物が重くなるからです。校外学習は、
おべんとうなど持ち物がたくさんあり、よゅうがありません。
だから、わたしは、校外学習に飲み物を持つていくときに、水とうを使う
べきだとは思いません。

〈確認テストの解答〉

1 エ
2 エ
3 イ
4 ア
5 ア

- 一題目**
- (1) おじいさん
 (2) さぬきのみやっこ
 (3) (例) 根元の光っている竹が一本あつたこと。
- 二題目**
- (1) イ
 (2) 春の夜の夢・風にふき飛ばされていくちり
 (3) ア
 (4) ウ

テキスト 解答

小5 国語 基礎

- 三題目**
- (1) イ
 (2) 明け方(あけぼの)
 (3) イ
 (4) ウ

をかし

四題目

- (1) (例) 春の明け方
 (2) 鳴き声
 (3) (例) 春のねむりがこじよかつたから。
 (4) (例) 花は、いつたい、どれくらい落ちたのだろうかということ。
 (5) ア

- 1 イ
 2 エ
 3 ア
 4 エ
 5 ア
- 〈確認テストの解答〉

小5 国語 基礎 テキスト 解答

五

- (3) おさがしする
 (2) お貸した
 (1) お聞きする
 (3) ご利用になつた
 (2) お帰りになつた
 (1) お登りになる

四

- (3) イアウ
 (2) ア
 (1) 三

- (5) イアウ
 (4) ア
 (3) ウ
 (2) アイ
 (1) 二

- (3) イウア
 (2) ウ
 (1) 一

ウ 九

1 イ
 2 ア
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547
 548
 549
 550
 551
 552
 553
 554
 555
 556
 557
 558
 559
 560
 561
 562
 563
 564
 565
 566
 567
 568
 569
 570
 571
 572
 573
 574
 575
 576
 577
 578
 579
 580
 581
 582
 583
 584
 585
 586
 587
 588
 589
 590
 591
 592
 593
 594
 595
 596
 597
 598
 599
 600
 601
 602
 603
 604
 605
 606
 607
 608
 609
 610
 611
 612
 613
 614
 615
 616
 617
 618
 619
 620
 621
 622
 623
 624
 625
 626
 627
 628
 629
 630
 631
 632
 633
 634
 635
 636
 637
 638
 639
 640
 641
 642
 643
 644
 645
 646
 647
 648
 649
 650
 651
 652
 653
 654
 655
 656
 657
 658
 659
 660
 661
 662
 663
 664
 665
 666
 667
 668
 669
 670
 671
 672
 673
 674
 675
 676
 677
 678
 679
 680
 681
 682
 683
 684
 685
 686
 687
 688
 689
 690
 691
 692
 693
 694
 695
 696
 697
 698
 699
 700
 701
 702
 703
 704
 705
 706
 707
 708
 709
 710
 711
 712
 713
 714
 715
 716
 717
 718
 719
 720
 721
 722
 723
 724
 725
 726
 727
 728
 729
 730
 731
 732
 733
 734
 735
 736
 737
 738
 739
 740
 741
 742
 743
 744
 745
 746
 747
 748
 749
 750
 751
 752
 753
 754
 755
 756
 757
 758
 759
 760
 761
 762
 763
 764
 765
 766
 767
 768
 769
 770
 771
 772
 773
 774
 775
 776
 777
 778
 779
 780
 781
 782
 783
 784
 785
 786
 787
 788
 789
 790
 791
 792
 793
 794
 795
 796
 797
 798
 799
 800
 801
 802
 803
 804
 805
 806
 807
 808
 809
 810
 811
 812
 813
 814
 815
 816
 817
 818
 819
 820
 821
 822
 823
 824
 825
 826
 827
 828
 829
 830
 831
 832
 833
 834
 835
 836
 837
 838
 839
 840
 841
 842
 843
 844
 845
 846
 847
 848
 849
 850
 851
 852
 853
 854
 855
 856
 857
 858
 859
 860
 861
 862
 863
 864
 865
 866
 867
 868
 869
 870
 871
 872
 873
 874
 875
 876
 877
 878
 879
 880
 881
 882
 883
 884
 885
 886
 887
 888
 889
 890
 891
 892
 893
 894
 895
 896
 897
 898
 899
 900
 901
 902
 903
 904
 905
 906
 907
 908
 909
 910
 911
 912
 913
 914
 915
 916
 917
 918
 919
 920
 921
 922
 923
 924
 925
 926
 927
 928
 929
 930
 931
 932
 933
 934
 935
 936
 937
 938
 939
 940
 941
 942
 943
 944
 945
 946
 947
 948
 949
 950
 951
 952
 953
 954
 955
 956
 957
 958
 959
 960
 961
 962
 963
 964
 965
 966
 967
 968
 969
 970
 971
 972
 973
 974
 975
 976
 977
 978
 979
 980
 981
 982
 983
 984
 985
 986
 987
 988
 989
 990
 991
 992
 993
 994
 995
 996
 997
 998
 999
 1000
 1001
 1002
 1003
 1004
 1005
 1006
 1007
 1008
 1009
 10010
 10011
 10012
 10013
 10014
 10015
 10016
 10017
 10018
 10019
 10020
 10021
 10022
 10023
 10024
 10025
 10026
 10027
 10028
 10029
 10030
 10031
 10032
 10033
 10034
 10035
 10036
 10037
 10038
 10039
 10040
 10041
 10042
 10043
 10044
 10045
 10046
 10047
 10048
 10049
 10050
 10051
 10052
 10053
 10054
 10055
 10056
 10057
 10058
 10059
 10060
 10061
 10062
 10063
 10064
 10065
 10066
 10067
 10068
 10069
 10070
 10071
 10072
 10073
 10074
 10075
 10076
 10077
 10078
 10079
 10080
 10081
 10082
 10083
 10084
 10085
 10086
 10087
 10088
 10089
 10090
 10091
 10092
 10093
 10094
 10095
 10096
 10097
 10098
 10099
 100100
 100101
 100102
 100103
 100104
 100105
 100106
 100107
 100108
 100109
 100110
 100111
 100112
 100113
 100114
 100115
 100116
 100117
 100118
 100119
 100120
 100121
 100122
 100123
 100124
 100125
 100126
 100127
 100128
 100129
 100130
 100131
 100132
 100133
 100134
 100135
 100136
 100137
 100138
 100139
 100140
 100141
 100142
 100143
 100144
 100145
 100146
 100147
 100148
 100149
 100150
 100151
 100152
 100153
 100154
 100155
 100156
 100157
 100158
 100159
 100160
 100161
 100162
 100163
 100164
 100165
 100166
 100167
 100168
 100169
 100170
 100171
 100172
 100173
 100174
 100175
 100176
 100177
 100178
 100179
 100180
 100181
 100182
 100183
 100184
 100185
 100186
 100187
 100188
 100189
 100190
 100191
 100192
 100193
 100194
 100195
 100196
 100197
 100198
 100199
 100200
 100201
 100202
 100203
 100204
 100205
 100206
 100207
 100208
 100209
 100210
 100211
 100212
 100213
 100214
 100215
 100216
 100217
 100218
 100219
 100220
 100221
 100222
 100223
 100224
 100225
 100226
 100227
 100228
 100229
 100230
 100231
 100232
 100233
 100234
 100235
 100236
 100237
 100238
 100239
 100240
 100241
 100242
 100243
 100244
 100245
 100246
 100247
 100248
 100249
 100250
 100251
 100252
 100253
 100254
 100255
 100256
 100257
 100258
 100259
 100260
 100261
 100262
 100263
 100264
 100265
 100266
 100267
 100268
 100269
 100270
 100271
 100272
 100273
 100274
 100275
 100276
 100277
 100278
 100279
 100280
 100281
 100282
 100283
 100284
 100285
 100286
 100287
 100288
 100289
 100290
 100291
 100292
 100293
 100294
 100295
 100296
 100297
 100298
 100299
 100300
 100301
 100302
 100303
 100304
 100305
 100306
 100307
 100308
 100309
 100310
 100311
 100312
 100313
 100314
 100315
 100316
 100317
 100318
 100319
 100320
 100321
 100322
 100323
 100324
 100325
 100326
 100327
 100328
 100329
 100330
 100331
 100332
 100333
 100334
 100335
 100336
 100337
 100338
 100339
 100340
 100341
 100342
 100343
 100344
 100345
 100346
 100347
 100348
 100349
 100350
 100351
 100352
 100353
 100354
 100355
 100356
 100357
 100358
 100359
 100360
 100361
 100362
 100363
 100364
 100365
 100366
 100367
 100368
 100369
 100370
 100371
 100372
 100373
 100374
 100375
 100376
 100377
 100378
 100379
 100380
 100381
 100382
 100383
 100384
 100385
 100386
 100387
 100388
 100389
 100390
 100391
 100392
 100393
 100394
 100395
 100396
 100397
 100398
 100399
 100400
 100401
 100402
 100403
 100404
 100405
 100406
 100407
 100408
 100409
 100410
 100411
 100412
 100413
 100414
 100415
 100416
 100417
 100418
 100419
 100420
 100421
 100422
 100423
 100424
 100425
 100426
 100427
 100428
 100429
 100430
 100431
 100432
 100433
 100434
 100435
 100436
 100437
 100438
 100439
 100440
 100441
 100442
 100443
 100444
 100445
 100446
 100447
 100448
 100449
 100450
 100451
 100452
 100453
 100454
 100455
 100456
 100457
 100458
 100459
 100460
 100461
 100462
 100463
 100464
 100465
 100466
 100467
 100468
 100469
 100470
 100471
 100472
 100473
 100474
 100475
 100476
 100477
 100478
 100479
 100480
 100481
 100482
 100483
 100484
 100485
 100486
 100487
 100488
 100489
 100490
 100491
 100492
 100493
 100494
 100495
 100496
 100497
 100498
 100499
 100500
 100501
 100502
 100503
 100504
 100505
 100506
 100507
 100508
 10050

小5	国語	基礎	テキスト	解答
1	工	(5) ウ	(1) ただでごちそうする	(1) (例)鳥もけものも一びきもないから。
2	ア	(4) ウ	(2) (例)太つていることと、わかいこと(の両方)。	(2) (例)鉄ぼうでうつ音。
3	ウ	(3) ウ		(3) イ
4	イ			(4) ケ
5	エ			(5) ア

(6) イ・ウ
 案内してきくたくらいの

二題目

（確認テストの解答）

(9) 一人(のしんじ)

一題目

(1) ①ア・イ・エ
②ア・エ

(2) A
B

A
B

D
E

C
F

B
オ

A店(の主人)
二人

二題目

ア
ウ

イ
エ

イ
ウ

(例) 部屋(戸)の中

(例) はらの中

イ
イ

ウ
ウ

イ
イ

(例) はらの中

(7) あとは、あなたがたと、菜つ葉をうまく取り合わせて、真つ白なお皿にのせるだけです。

(8) そんなら、これから火をおこしてフライにしてあげましょうか。

(9) ③親分

〈確認テストの解答〉

1 イ
2 ア

3 ウ

4 イ

5 エ

一題目

(1) 辞書・字引き

(3) 初め……辞書のお
終わり……れない。**二題目**

(2) ウ (1) 辞書・字引き

(3) イ (2) 説明 (1) 道具
イ・日常よく使われる
放つたらかし1 イ (確認テストの解答)
2 ウ
3 ア
4 ウ
5 エ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

(5) イ	(4) イ	(3) ア	(2) ア	(1) ア	四	(5) エ	(4) オ	(3) イ	(2) ア	(1) ウ	一
イ	イ	ア	ア	ア		工	オ	イ	ア	ウ	才・ク
（それぞれ順不同）						コ	キ	カ	ケ	ク	力
(4) 登山	(3) 墓石	(2) 夫妻	(1) 計測	豊富	絵画	(4) ア	(3) イ	(2) ウ	(1) ク		
・退場	・西洋	・新旧	・勝敗			・キ	・カ	・ク			
・消防	・大群										

(3) 热	(2) 厚	(1) 暑	(2) 者	(1) 物	八	(2) 対	(3) 対	(2) 自	(2) 信	(1) 医院	七	(2) ウ	(1) ア	(2) エ	(1) ア	(3) ア	(2) エ	(1) ウ	六	(5) ア	(4) イ	(3) ア	(2) ア	(1) イ	五
						照	象	身	自	院															

1 付 着 早 速 (3)
工
2 ア 答 <確認テストの解答>
3 イ
4 ア
5 工

一題目

(1) イ
(2) 曲自身が、変化がすくなくてつまらないから。

(3) 工

二題目

(1) 例曲第一交響曲の作曲(をしていたとき。)

① 和音が、高

（確認テストの解答）

(2) ア
(3) (例)スケッチした譜面を、ピアノでひいてみた音。

1 ウ 2 イ 3 ウ 4 イ 5 ウ

(1) 春
(2) 夜明けの光
□

(3) 秋
(1) 秋
(2) 夜明けの光
□

(4) イ
(2) ウ

(1) イ・エ
□
(2) Aさざ波

B(例)きらきらとかがやいて

(5) 水
(4) なでる
(3) さわらび

小5 国語 基礎 テキスト 解答

四 □

(3) (2)
工 ウ

三 □

(1) 路上にとまつたトラック一台が、ガレージにはいろいろとしている様子。

一 □

二 □

三 □

四 □

1 イ
2 ア
3 ウ
4 イ
5 エ

〈確認テストの解答〉

小5 国語 基礎 テキスト 解答

(1) A 季語：名月
季節：秋

(2) C 工季語：雪とけて
季節：春

(3) イ (2) イ (1) 季語
季節 蛙 かはづ

(4) あ (3) あ (2) ウ (1) イ
ウ ア 例 ウ イ

(3) (2) 五さ T

(1) あ(例) 母に早く会いたい
(2) ヴ
(3) あ(ウ)

(1) あ(例) 母に早く会いたい(気持ち)

(2)五月雨の／晴れ間にいで／眺むれば／青田すゞしく／風わたるなり／

(3) (2) (1) **五**
工 イ か
な

確認テストの解答

3
工

4
ウ

5
ア

一題目

(1) (例) 左右のつばさに、一か所ずつ、真っ白な交じり毛を持っていたから。

(2) ア

(3) あいまいらしい（存在。）

- ① (例) 残雪が来るようになつてから、一羽のがんも手に入れることができなくなつたから。
 (4) 翌日^よの昼近

二題目

(1) イ

(2) (例) 夜明け(早朝)

(3) ほおがびりびりするほど引きしまる

(4) (例) (いつものえ場に) 昨日までなかつた小さな小屋があつた。

(5) ヴ

(6) (7) じいさんが「きました。
 ・ときどき、「いました。
 〔順不同〕

(8) (例) (がんは)いちばん最初に飛び立つものの後について飛ぶ(という特性。)

(例)(二年前に)つりばりの計略^{ひきやく}で生けどつたがん。

〈確認テストの解答〉

- 1 イ 2 ア 3 エ 4 ヴ 5 ヴ

一題目

(1) 大造じいさんのおとりのがん
(2) 大造じいさん

(4) (3) ウ
(2) ア

二題目

(1) はやぶさ

(2) ア

(3) 大造じいさん（人間）

(4) (例) 最期^{さいご}のときを感じても頭領^{とうりょう}らしく堂々としている様子。

(5) ア
(6) (例) らんまんとさいたすももの花
(7) らんまんとさいたすももの花
(8) ウ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

（確認テストの解答）

- 1 イ
- 2 ア
- 3 ウ
- 4 ア
- 5 エ

一題目

- (1) 自分の理想～のような人
(2) 理想～人間も
現実～宗教に

(4) (3) イ
ア

二題目

- (1) 植物や石ころを集めるのが大好きな少年
(2) (店のあとをつぐより)いつか世の中のためになる仕事がしたい
(3) たまたま読んだ宗教の本に深く感動したから。

(4) 石や土
(5) (例)(石や土のよつな)命のないものでも持つていてるすばらしい美しさを、
文章にすることができるたらどんなにすてきだろうと思ふ気持ち。
(6) 童話の中では、現実に(現実にできないことが)～つくることができる。

小5 国語 基礎 テキスト 解答

- （確認テストの解答）
1 ウ 2 ア 3 イ 4 エ 5 ア

一題目

(2) ウ

(3) 北上川のほとりの、林に囲まれたおかの上の家

(4) (例) 農民たちと新しい未来について話し合う部屋。

(5) (例) 農作業のできない日に読書をしたり文章を書いたりするための書き

い。

(6) (例) 朝早くから夜おそまでどろまみれになつて働いた。

(7) (例) 食べる物はげん米とみそしると野菜ぐらいだった。

(8) (例) ふろに入る代わりに、いど水で体をふいた。

(9) (各順不同)

(10) (6) これまでのどんな生活よりもすばらしい(もの)

(7) イ

<確認テストの解答>

1 ア 2 イ 3 エ 4 イ 5 イ

小5 国語 基礎 テキスト 解答

(1) 山登り・山下り

(4) イウ (3) ウ (2) イ (1) 工

二題目

(3) ウ (2) イ (1) ウ

期待感・絶望・希望・目

（「絶望」「希望」の順番は逆でもよい）

（確認テストの解答）
1 イ
2 ア
3 イ
4 工
5 ウ

一題目

(1) ア・ウ・エ(順不同)

(2) え

(3) aミネラル類
bビタミン類(4) ウ
(5) 多くの花をいろいろな形で味わい、楽しむこと

- 1 ア
2 エ
3 ウ
4 イ
5 エ

（確認テストの解答）